

小野遺跡

舟見ヶ丘保幼園建設事業に伴う市道改良工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

2006. 3

石川県小松市教育委員会

例 言

- 1 本書は、舟見ヶ丘保幼園建設事業に伴う市道舟見ヶ丘線および市道古府国府小学校線道路改良工事に係る小野遺跡発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び係る事務等は、小松市健康福祉部児童家庭課より、一般経費から委託費として転配当を受け、埋蔵文化財調査室が行った。
- 3 発掘調査の識別名称は「市道小野」、遺物の注記は、「ON I」(市道舟見ヶ丘線)、「ON II」(市道古府国府小学校線)である。
- 4 発掘調査面積、期間および担当者は、次のとおり。

1次 (市道舟見ヶ丘線)

調査面積 210 m²

調査期間 着手：平成 17 年 2 月 21 日
完了：平成 17 年 3 月 22 日

担当者 廣田 いづみ、岩本 信一

2次 (市道古府国府小学校線)

調査面積 395 m²

調査期間 着手：平成 17 年 5 月 23 日
完了：平成 17 年 6 月 17 日

担当者 宮田 明

- 5 発掘調査は、(社) 小松市シルバー人材センターより作業員の派遣を受けて実施し、一部臨時作業員も雇用した。
- 6 出土品整理及び実測作業は、臨時作業員を雇用して実施した。
- 7 遺構の写真撮影は、発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、宮田が行った。
- 8 実測図はデジタルトレースにより宮田が製図した。
- 9 本書の編集・執筆は、宮田が行った。
- 10 発掘調査に係る遺物、図面、写真等の資料は、全て小松市教育委員会で一括保管している。
- 11 本書の編集・執筆にあたり、特に喫煙関連遺物に関して、以下の個人にご教示頂いた。ご芳名を記して感謝の意としたい。(五十音順、敬称略)

岡本 有司 (陶芸家)、佐久間 忍 (陶芸家)

凡 例

- 1 本書に示す座標は、世界測地系 (VII 系) に準拠し、高度の表示は標高 (T.P.) である。
- 2 本書に示す方位は座標北である。(調査地における真正北方向角は、計算上で約 23 分 29 秒)
- 3 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。

- 4 本書に示す土性は、日本ペドロジー学会の野外土性判定法を参考に表記しているが、厳密なものではなく、あくまで相対的な表記である。
- 5 本書に示す実測図には、次の記号を使用している。

- ▼ 反転復元実測
▽ 反転復元実測および任意回転描画

本文目次

I	位置と環境	1
II	発掘調査に至る経緯と経過	11
III	遺構と遺物	17
IV	平成 13 年度踏査採集遺物	19
V	結語	27
	報告書抄録	卷末

図版目次

図版 1	小野遺跡平面図
図版 2	掘立柱建物跡実測図 1~4
図版 6	周溝状遺構実測図
図版 7	出土遺物実測図 1~2
図版 9	平成 13 年度踏査採集遺物実測図
写真図版 1	掘立柱建物跡 1~4
写真図版 5	柱穴・周溝状遺構
写真図版 6	近現代の擾乱 1~2
写真図版 8	出土遺物 1~2
写真図版 10	平成 13 年度踏査採集遺物 (国府台地)

I 位置と環境

1 地理的環境

小松市は石川県南部に位置し、東西約20km、南北約30kmに跨る市域は面積371.13km²を測る。南は大日山(1368m)を隔てて福井県勝山市と境界を接し、ここより約5km北に位置する鉢ヶ岳(1174m)を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約11万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣7町村を合併して昭和15年市制施行、その後2次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

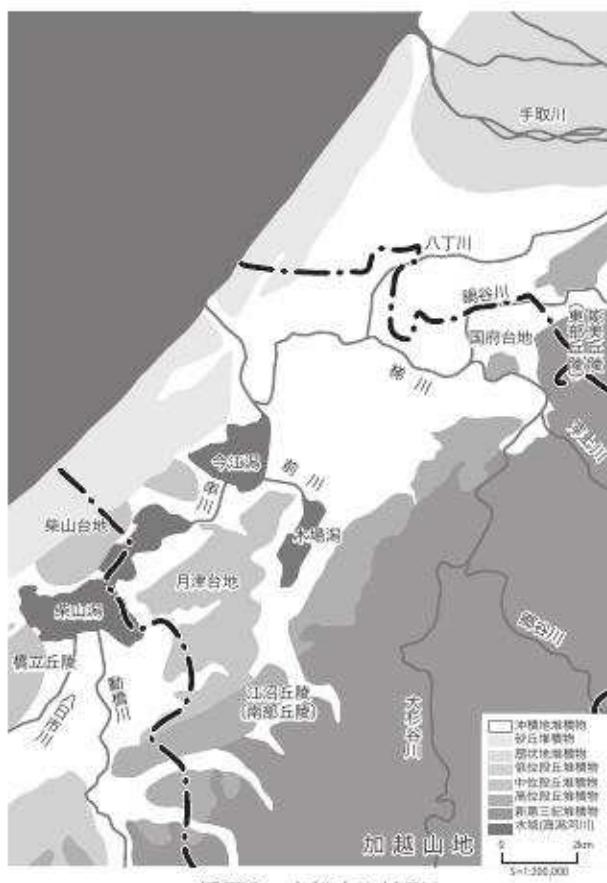
小松市の平野部は、南半の段丘地域と北半のデルタ地域に区分される(挿図2)。

小松市の山岳地(加越山地)は新第三紀火碎流堆積物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約20m程度あるが、平均的には5~10m程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が広がっていたが、現在は今江潟の全域、柴山潟の約3分の2が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川、浮上川等を合わせて、国府台地をえぐりながら西に向きを変え、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。挿図2は明治時代の河道を合成したものだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。

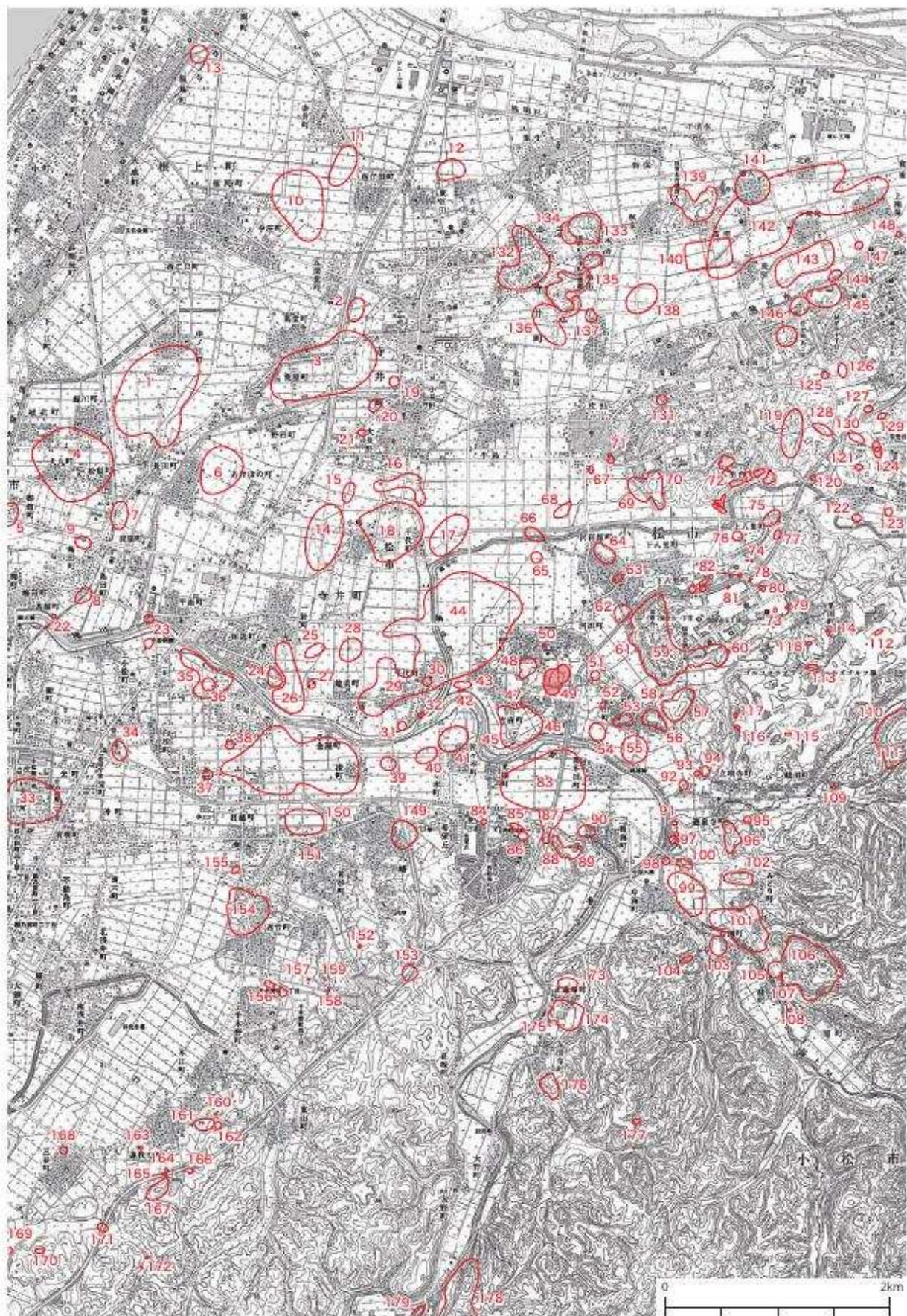


市勢と沿革



月津台地

梯川デルタ



挿図3 周辺の遺跡分布図

S=1:50,000

梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返されてきた。明治44年～大正12年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事実上、梯川と今江湯・木場湯を結んだ東側の領域を指している。図に表示はないが、この領域には明治20年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば湛水被害を引き起こし、明治32年の耕地整理法以降、用水確保と湛水防除の必要から用排水路の整備が繰り返し行われた。

梯川旧河道

2 歴史的環境

旧石器～縄文時代の遺跡は発見例が増加しつつあるものの、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵界隈に限って言えば、河田山遺跡(59)や八里向山遺跡群(72)など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、明確な集落遺跡としての確認例はない。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷A～D遺跡や宮竹うしょやまA・B遺跡(いずれも国郭外)など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。様々な要素(例えば、月津台地における近代以降の耕地整理や土採取の影響)を考慮しなければならないが、現状において、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなしていると見なされる。

旧石器～縄文時代

弥生時代では、八日市地方遺跡(33)が大規模な環濠集落として特筆されるが、中期はここだけに収斂する趨勢で、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂遺跡(3)、大長野A遺跡(14)、漆町遺跡(38)、荒木田遺跡(83)のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡(59)や八里向山A遺跡(72)で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

弥生時代

古墳時代では、能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山5・6号墳(133)、秋常山1号墳(139)、和田山5号墳(135)を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に隣接して造営される。国府台地周辺では河田山古墳群(59)が造営されるが、首長墓云々より、河田山12・33号墳の横穴式石室に代表されるような渡来系の要素が注目されている。

古墳時代

集落遺跡の趨勢で言えば、6世紀以降8世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。8世紀、在郷の財氏関連遺跡とされる佐々木遺跡(39)が異彩を放つほかは、概ね盛期が9世紀後半～10世紀前半になる傾向が知られている。寺院跡として、挿図3には中宮八院(94、95、99、105、173、174、176)を表示しているが、現状は伝承

集落遺跡の 趨勢

地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、八里向山B遺跡(72)里川E遺跡(116)、淨水寺跡(153)が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、淨水寺のほかは短期間で廃絶している。

莊園 律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡(142)、下開発遺跡(143)が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江梯川遺跡(35)、漆町遺跡(38)は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡(36)は、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事実を勘案すれば、ここに比定すべきだろう。

再興九谷窯 現集落の多くは近世に成立した集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。19世紀の若杉窯(151)開窯で再興された九谷焼は、本遺跡周辺では民窯として小野窯(50)が操業され、近代以降も製陶業や製瓦業が盛んな土地柄であり、現在も操業を続ける業者がある。

3 加賀国府・加賀国分寺の周辺

府南社 国府台地は、梯川右岸、能美丘陵から西に突き出た狭隘な段丘である。この南端「フナミヤマ(舟見山)」に鎮座する石部神社は、能美郡式内八社の一つに当てられ、府南社ともいう。「国府」の地名は、この舟見山の北に横たわる集落の旧名で、藩政前期に興るが、明治18年に麓の古浜村と合併して古府村となりこの村名は一旦消滅した。藩政後期の『越登賀三州志』には、この村に国分寺跡伝承地があることに触れている。ちなみにその後、明治40年の合併で村の村名が復活する。

国府台地に加賀国府を比定する根拠の一つになっているのは府南社の社名で、「府」が国府のことを指しているとの解釈による。吉岡康暢は、国府台地と周辺の地名や資料を思索し、他説にも言及しつつ国府台地に拘執している(吉岡1991)。

加賀国府移転説 また、近年の金沢市西部再開発に係る諸発掘調査で、金石本町遺跡や戸水C遺跡など8世紀後半～10世紀前葉にかけて、港湾・流通関連の遺跡群の存在が明らかとなり、戸水大西遺跡や畠田ナベタ遺跡の「政序的」遺構群など、823(弘仁14)年の加賀立国を前後する時期と、流布本より原撰に体裁が近いとされる大東急記念文庫本『和名類聚抄』の加賀郡の郡名の肩下「国府」の註を主な根拠に、9世紀～10世紀が地方官衙の転換期となる趨勢も相俟って、立国当初は加賀郡に国府が置かれ、9世紀後半以降に能美郡へ移転したとする加賀国府移転説が云々されている。

現在、国府所在地は少なくとも10世紀以降は国府台地に比定する考え方が主流のようだが、立国当初から能美郡に置かれたとする説も加賀郡から移転したとする説も、両者で国府・国分寺に比定可能な遺跡が未見であり、傍証的な推論に収斂する現状を抱えている。

表1 遺跡地名表

No.	名 称	種 别	時 代	備 考
1	中ノ江遺跡	散布地	古墳～中世	
2	高堂四方堂遺跡	散布地	弥生	
3	高堂遺跡	集落跡	弥生～中世	
4	松梨遺跡	集落跡	弥生～中世	
5	倒鉢遺跡	城館跡	中世	
6	長田遺跡	散布地	弥生～古墳	
7	長田南遺跡	集落跡	弥生・中世	
8	島田A遺跡	散布地	古墳～古代	
9	島田B遺跡	集落跡	古墳	
10	中ノ庄遺跡	散布地	弥生～古代(平安)	
11	西任田遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
12	吉光遺跡	散布地	弥生・中世(室町)	
13	福島遺跡	散布地	古墳	
14	大長野A遺跡	集落跡	弥生～中世	
15	大長野B遺跡	散布地	不詳	
16	牛島宮の島遺跡	集落跡	古代(平安)	
17	牛島ウハシ遺跡	集落跡	縄文～中世	
18	千代マジロ遺跡	集落跡	弥生～中世	
19	小長野遺跡	散布地	不詳	
20	小長野B遺跡	散布地	古墳	
21	小長野C遺跡	集落跡	古代(奈良～平安)	
22	幡川鉄橋遺跡	散布地	弥生	
23	平面梯田遺跡	集落跡	弥生	
24	一針遺跡	散布地	縄文	
25	一針B遺跡	集落跡	弥生～古墳	
26	一針C遺跡	集落跡	弥生～古墳	
27	定地坊跡	寺院跡	中世(室町)	
28	千代・能美遺跡	集落跡	古墳～中世	
29	千代オオキダ遺跡	集落跡	古墳～中世	
30	千代城跡	城館跡	中世(室町)	
31	千代本村遺跡	散布地	古墳	
32	焼地道路	散布地	縄文	
33	八日市地方遺跡	散布地	縄文・中世	
		集落跡	弥生	環濠集落
34	上小松遺跡	散布地	古代(平安)	
35	白江桜川遺跡	集落跡	弥生	
36	白江塙跡	城館跡	中世(室町)	白江新介景平の居館跡か
37	白江遺跡	集落跡	弥生～中世	塙町遺跡群の一部
38	塙町道路群	集落跡	弥生～中世	
39	佐々木遺跡	集落跡	古代(奈良～平安)	財氏居宅跡(奈良)
40	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
41	佐々木アサバタケ遺跡	集落跡	弥生～中世	
42	古府フンドド遺跡	散布地	古代(平安)	
43	古府遺跡	集落跡	古代(平安)	
44	古府しのまち遺跡	集落跡	弥生～古代	
45	古府シマ遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
46	南野台遺跡	散布地	縄文・古墳	
47	古府横穴	その他	不詳	
48	十九堂山遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀国分寺推定地
49	十九堂山中世墓跡群	その他の墓	中世(室町)	
50	小野遺跡・小野スギノキ遺跡	集落跡	古代(平安)	加賀国府推定地の一隅
51	小野古窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷窯
52	埴田ミヤケノ遺跡	散布地	不詳	
53	埴田ミヤンタン遺跡	散布地	不詳	
54	埴田フルカウ遺跡	散布地	古墳	
55	宮谷寺屋敷遺跡	散布地	縄文・中世(室町)	
56	埴田横穴	散布地	古代～中世	
57	埴田山古墳群	古墳	古墳	
58	御菩提所古墳	古墳	古墳	
59	河田山遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落
		その他の墓	古代(奈良)	火葬墓
	河田山古墳群	古墳	古墳	
60	河田山横穴	横穴墓	中世	地下式坑
		生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯
		不詳		須恵器窯
	河田山古窯跡	生産遺跡	不詳	
61	河田B遺跡	散布地	縄文・古代(奈良)	
62	河田C遺跡	散布地	不詳	
63	谷内横穴	その他	不詳	
64	河田鉢遺跡	散布地	縄文・中世	
65	下出地湖遺跡	散布地	不詳	
66	佐野A遺跡	散布地	弥生	
67	佐野B遺跡	散布地	古墳	
68	佐野八反田遺跡	散布地	古代(奈良～平安)	
69	河田向山下遺跡	散布地	縄文・古代(平安)	
70	河田向山古墳群	古墳	古墳	
71	狭野神社前遺跡	散布地	古代(平安)	
72	八里向山A遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落
	八里向山B遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		社寺跡	古代(奈良)	
	八里向山C遺跡	散布地	旧石器～縄文・古代(奈良)	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
72	八里向山C遺跡	集落跡	弥生	
		古墳	古墳	
72	八里向山D遺跡	散布地	旧石器～繩文	
		集落跡	弥生～古墳	
		古墳	古墳	
72	八里向山E遺跡	散布地	旧石器～繩文	
		集落跡	古代	
		古墳	古墳	
72	八里向山F遺跡	散布地	繩文	
		古墳	古墳	
		その他墓	中世(鎌倉)	集石墓・横穴
73	八里向山G遺跡	散布地	弥生・古代(平安)	
74	八里向山H遺跡	その他墓	中世(鎌倉)	集石墓群
75	八里向山I遺跡(八里向山1号窯跡)	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯
76	八里向山J遺跡(八里向山1号窯跡)	生産遺跡	古墳	須恵器窯
77	上八里1号窯	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯
78	上八里2号窯	生産遺跡	不詳	地下式窯窓
79	上八里中世墓跡	その他墓	中世(室町)	
80	上八里A遺跡	散布地	繩文・古代(平安)	
81	上八里B遺跡	散布地	古代(奈良)	
82	上八里C遺跡	横穴墓	古墳	
83	上八里D遺跡	散布地	古代(奈良)	
84	上八里横穴群	横穴墓	中世(室町)	
85	穴場横穴	その他	不詳	
86	下八里横穴群	横穴墓	不詳	地下式坑
87	下八里1号窯跡	集落跡	弥生～中世	
88	大谷口遺跡	散布地	弥生	
89	大谷口遺跡	散布地	弥生～中世	
90	鶴山五造遺跡	生産遺跡	弥生	玉作
91	鶴山五造遺跡	集落跡	繩文～中世	
92	鶴山五造遺跡	散布地	中世(鎌倉・室町)	集石墓群
93	鶴山五造遺跡	社寺跡	古代(平安)	大興寺伝承地
94	鶴山五造遺跡	社寺跡	古代(平安)	西芳寺伝承地
95	遊泉寺遺跡	散布地	繩文	
96	遊泉寺・クボタA遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
93	遊泉寺・クボタB遺跡	散布地	古代(平安)～中世	社寺(隆明寺)又は城館伝承地
	立明寺古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯(瓦陶兼窯)
94	立明寺古墳	古墳	古墳	
	隆明寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
95	浦泉寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
96	宮の奥墳墓群	その他墓	古代(平安)	2号墓は鎌倉時代に経塚として利用された(?)
97	佐生寺跡・佐生寺塚	社寺跡・経塚	中世	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
98	ブッシュウジヤマ古墳群	古墳	古墳	
99	中海 B 遺跡	集落跡	古墳～中世	
	山長寛寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院
100	中海 C 遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
101	中海遺跡・岩瀬遺跡	集落跡	縄文	
	岩瀬上野遺跡	散布地	旧石器	
102	長寛寺中世墓跡	その他墓	中世	
103	赤穂谷口遺跡	散布地	縄文	
104	松の木谷横穴群	その他	不詳	
105	香樹寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院
106	岩瀬城跡	城館跡	中世	
107	仏ヶ原城跡	城館跡	不詳	
108	仏御前屋敷跡・仏御前墓	その他墓	古代(平安)	
109	常徳寺跡	社寺跡	中世(室町)	一向一揆、宇川常徳居宅跡とも
110	鶴川里跡	城館跡	不詳	一向一揆、宇川常徳詰城伝承地
111	鶴川横穴	その他	不詳	
112	里川 A 遺跡	生産道路	不詳	製炭窯
113	里川 B 遺跡	生産道路	不詳	製炭窯
114	里川 C 遺跡	生産道路	不詳	製炭窯
115	里川 D 遺跡	散布地	縄文	
116	里川 E 遺跡	社寺跡	古代(平安)	
117	里川 F 遺跡	社寺跡	古代(平安)	
118	里川 G 遺跡	散布地	不詳	
119	和氣 1 号窯跡	生産道路	古代(平安)	須恵器窯
120	和氣下和氣古窯跡	生産道路	古代(平安)	須恵器窯
121	和氣近井窯跡	生産道路	近世	
122	和氣矢口 A 遺跡	散布地	縄文	
123	和氣公文館敷跡	城館跡	不詳	
124	和氣和見遺跡	散布地	不詳	
	和氣和見古窯跡	生産道路	古代(平安)	須恵器窯
125	下總山 A 遺跡	散布地	古代(平安)	
126	下總山 C 遺跡	散布地	不詳	
127	下總山 D 遺跡	生産道路	古代(奈良)	須恵器窯ほか
128	下總山金谷地遺跡	生産道路	古代(奈良)	須恵器窯
129	下總山御陵山遺跡	生産道路	古代(奈良)	須恵器窯ほか
130	下總山トモサダ遺跡	散布地	不詳	
131	湯谷道路	散布地	古墳	
132	能美古墳群 寺井山支群	古墳	古墳	
133	能美古墳群 末寺山支群	古墳	古墳	
134	末寺山下遺跡	散布地	古代(平安)	
135	能美古墳群 和田山支群	古墳	古墳	
136	和田山下遺跡	散布地	縄文・古墳	
137	石子道路	散布地	中世	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
138	秋常遺跡	散布地	古代（平安）	
139	能美古墳群 秋常山・西山支群	古墳	古墳	
140	高座遺跡	集落跡	魏文・古墳・中世	
141	徳久山上鍵跡	城館跡	不詳	
142	徳久・荒尾遺跡	集落跡	魏文～中世	
143	下開発遺跡	集落跡	古墳～古代（平安）	東大寺領鱗生莊比定地
144	下開発クモンミヤ遺跡	集落跡	古代（平安）～中世	
	下開発茶臼山遺跡	集落跡	魏文・中世	
145	下開発茶臼山古墳群	古墳	古墳	
	茶臼山製鉄跡群	生産遺跡	不詳	
146	荒尾古墳群	古墳	古墳	
147	上開発カワリダ遺跡	散布地	中世	
148	上開発古墳	古墳	古墳	
149	八幡遺跡	集落跡	魏文～近世	
149	八幡古墳群	古墳	古墳	
149	八幡布杉古窯跡	生産遺跡	近世末	丹脚九谷窯
150	打越遺跡	散布地	古代（平安）	
151	若杉古窯跡	生産遺跡	近世末	丹脚九谷窯
152	若杉オツボ山1号窯跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯
153	淨水寺跡	社寺跡	古代～中世	
154	吉竹遺跡	集落跡	弥生～中世	
155	吉竹B遺跡	その他	古墳	鍬跡
156	千木野A遺跡	古墳	古墳	
	千木野B遺跡	集落跡	古墳	
157	轢生1号墳	古墳	古墳	
158	釜谷古墳	古墳	古墳	
159	釜谷2号墳	古墳	古墳	
160	本江古窯跡	生産遺跡	近世末	丹脚九谷窯
161	蓮台寺跡	社寺跡	中世	源氏氏菩提寺伝承地
162	蓮代寺A遺跡	生産遺跡	不詳	鶴津散布地
163	蓮代寺瓦窯跡	生産遺跡	近世	燒瓦窯
164	蓮代寺古窯跡	生産遺跡	近世末	丹脚九谷窯
165	蓮代寺ムコンヤマ製鉄跡	生産遺跡	古代（平安）	製鉄炉・鋳模窯
166	蓮代寺ガッショウタン製鉄跡	生産遺跡	古墳	鶴津散布地・製炭窯
167	蓮台寺城跡	城館跡	不詳	
168	三谷遺跡	散布地	魏文	
169	三谷B遺跡	散布地	弥生～古墳	
170	三谷トガ谷遺跡	その他	不詳	山脈に塚状の高まり
171	三谷大谷遺跡	集落跡	古代～中世	
172	三谷大谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	鶴津散布地
173	昌隆寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院
174	義国寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院
175	椎の木山遺跡	散布地	魏文	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
176	松谷寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院
177	赤穂谷スギノキ谷横穴群	横穴墓	中世	横穴墓・地下式坑
178	平野堡跡	城館跡	中世	一向一揆・平野某藩城伝承地
179	江指城跡(山神山跡)	城館跡	中世(室町)	

参考文献 (I)

- イ 石川県立埋蔵文化財センター (1986) 漆町遺跡 I
 石川県立埋蔵文化財センター (1988) 漆町遺跡 II
 石川県立埋蔵文化財センター (1988) 白江梯川遺跡 I
 石川県立埋蔵文化財センター (1989) 漆町遺跡 III
 石川県立埋蔵文化財センター (1989) 漆町遺跡 IV
 石川県立埋蔵文化財センター (1989) 白江梯川遺跡 II
 石川県立埋蔵文化財センター (1988) 辰口西部遺跡群 I
 石川県立埋蔵文化財センター (1990) 小松市高堂遺跡
 石川県立埋蔵文化財センター (1993) 能美丘陵東遺跡群 I
 石川県立埋蔵文化財センター (1995) 荒木田遺跡
 石川県立埋蔵文化財センター (1997) 能美丘陵東遺跡群 II
 石川県立埋蔵文化財センター (1998) 能美丘陵東遺跡群 III
 (財)石川県埋蔵文化財センター (1999) 能美丘陵東遺跡群 IV
 (財)石川県埋蔵文化財センター (1999) 能美丘陵東遺跡群 V
 (社)石川県埋蔵文化財保存協会 編 (1997) 石川県出土文字資料集成, p25-38.
- 力 軽海用水誌編纂委員会 編 (1996) 軽海用水誌, 小松東部土地改良区, p75-77, p201-221.
- コ 国府村史編纂委員会 (1956) 国府村史, 国府村役場, p707-714, p734-736.
- 小松市教育委員会 (1996) 荒木田遺跡
 小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I
 小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡
 小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群
- テ 寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群
- ヘ 日置 謙 (1923) 石川県能美郡誌, 石川県能美郡役所, p366-375, p1332-1333.
- 木 北陸中世土器研究会 編 (1997) 中・近世の北陸, 桂書房, p154-155.
- ヨ 吉岡康暢 (1991) 加賀, 新修国分寺の研究 3, 吉川弘文館, p263-322,

II 発掘調査に至る経緯と経過

1 既往の調査と知見

小松市内の耕地整理は、明治42年～大正2年、八日市地方（現日の出町）を皮切り 耕地整理 に各所で着手された。段丘の開田工事は、大正2年に御幸村～粟津村（現今江町～符津町）で実施されたのが最初となる。当時は荒蕪地も多く、開墾も推奨されていたという。国府台地の耕地整理も段丘の開田工事で、昭和2～6年に実施された。

明治期の殖産興業で紡織が盛んだったため段丘地では桑園が多かったが、食糧増産の政策から平野部だけにとどまらず段丘地も水田化され、これらは必ずしも成功はしなかつたが、今日的にはこのときに破壊された遺跡は数多い。

昭和29年、国府村史編纂事業の一環として、上野與一らを招聘して実施された十九堂山の発掘調査は、その前年に上記の耕地整理後の畠に散布していた瓦片を採集した事を契機としている。加賀国分寺跡を想定しての発掘調査であり、この結果、平安初期布目瓦8点、海岸栗石の根石群4箇所、五輪塔破片2点、人骨1箇所、須恵器破片無数の資料を得た。この翌年には北方の小野地内の畠で軒平瓦片が採集され、翌々年には西麓の通称「不動堂」（古府フンド遺跡）で軒丸瓦片が採集された。これらは、今日的には南加賀窯産で国分寺修復瓦に想定されている。

十九堂山の発掘調査を主導した上野與一は、この結果について、国分寺の寺域としては狭小にすぎ、屋瓦の出土が少ないと考古学的根拠が薄弱とする所見から、その後発見された津波倉廃寺（ショウコウジの地名を残す）、勝興寺の旧跡とされる弓波廃寺を加賀国分寺に比定する所論を述べた（上野 1958）。

昭和30年代は、低地の湿田を乾田化する区画整理が各所で実施され、段丘地は土採場に当てられている。国府台地も例外ではなく、周辺湿田の客土として土採取された。地元関係者の証言によれば、昭和40年までに大がかりな造成工事を2回実施しているという。当時、国府台地では地元の製瓦業者が盛んに耐火粘土採掘を行っていたということで、耕地として再整備する工事と見られるが、市史等にこうした記録は見えない。

昭和48年には、鍋谷川左岸一帯の土地改良事業（県営ほ場整備事業小松東部地区）の土採場となり、市教委が試掘調査を実施したが、遺物の出土はなく、跡地は水田になっている。ほ場整備区域は、排水路の部分について県教委が発掘調査を実施している（古府しのまち遺跡）。

昭和54年の県立埋文センター発足当初、県内遺跡詳細分布調査が行われた。国府台地では新たに小野遺跡、小野スギノキ遺跡、埴田ミヤケノ遺跡が改訂された『石川県遺跡地図』に登録された。このうち、小野スギノキ遺跡の遺物には、墨書のある資料が1点含まれていた（県立埋文センター 1984）。

平成12～13年に、市教委埋文調査室は市内遺跡の踏査を実施し、既刊の遺跡地図の追認作業を行った。国府台地界隈は平成13年6月に踏査し、比較的多くの遺物が確認され、細片ばかりで詳細な時期は不明だが、いずれの地点でも須恵器、土師器が採集され、若干の中世陶器が含まれていた。

ここまで述べてきたとおり、国府台地における最初の考古学的調査となる十九堂山の 遷疑遠巡

発掘調査の時点で耕地整理施工後であり、すでに著しい損壊を受けた状態での調査となっている。トレントが設定された地点は定かではないが、「海岸栗石の根石群」とされる遺構は、今日的には集石墓と思われ、現在の十九堂山中世墓の一部に係っていると見られる。その後の度重なる粘土採掘や土採取によって、国府台地上の遺跡は潰滅状態となっており、踏査で遺物を採取しただけでは、その下が遺跡なのか否かも判断できない状態と考えられる。造成土とともに移動した遺物を採取している可能性は否めない。

2 (仮称)国府保育園建設事業と市道改良工事

協議 国府台地上の河田町地内に保育園を建設する計画は平成12年からすでにあり、調査室にも水面下で埋蔵文化財包蔵地に関する照会を受けていた。この段階で、当該地が埋蔵文化財包蔵地になっているために試掘調査を実施する必要を口頭で伝えていた。

試掘調査 計画に実施の目途が立ったのは平成15年度で、3月8日～22日に試掘調査を実施した(挿図5)。その結果は、広範囲にわたり耕地整理等の造成に伴う削平を受けており、図の赤く塗った範囲で完全に削平されるなど遺存状態は悪かったが、疎らながらも須恵器・土師器の破片が出土し、7号トレント(7TT)では掘立柱建物跡(SB01)が検出された(挿図7)。協議の結果、盛土による保存措置を講じるように設計を見直すことになった。

平成16年度、建設されるのは民間法人の「舟見ヶ丘保幼園」と決まり、狭小な既存道路を整備することになった。市道舟見ヶ丘線については8月10日、同古府国府小学校線については10月13日にそれぞれ試掘調査を実施し、遺物の出土を確認した。

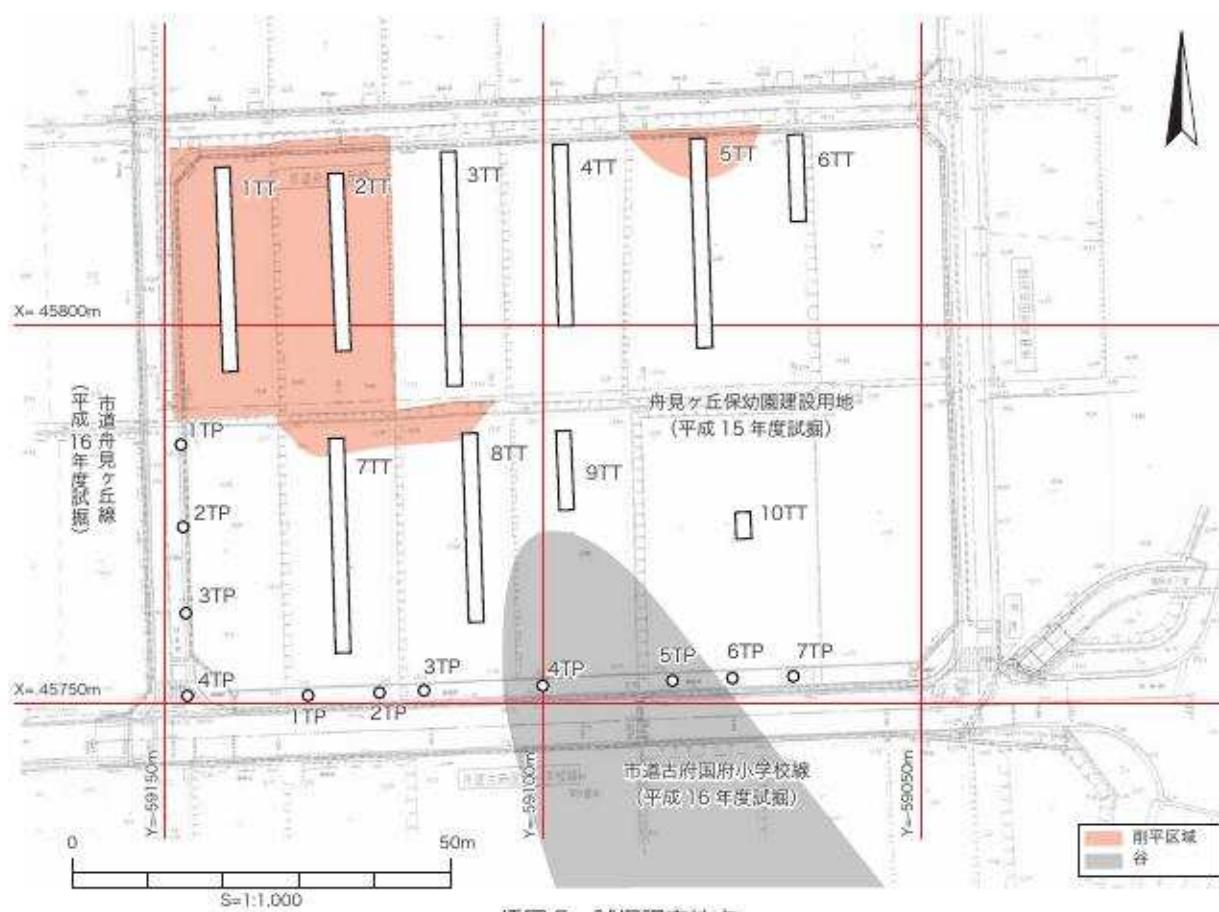
立会調査 協議の結果、両者とも発掘調査を実施する方向で調整し、対象地以外の区域については、掘削を伴う工事に立会調査を実施することになった(挿図4)。その間の経過は表2にまとめた。

表2 発掘調査に至る経過一覧

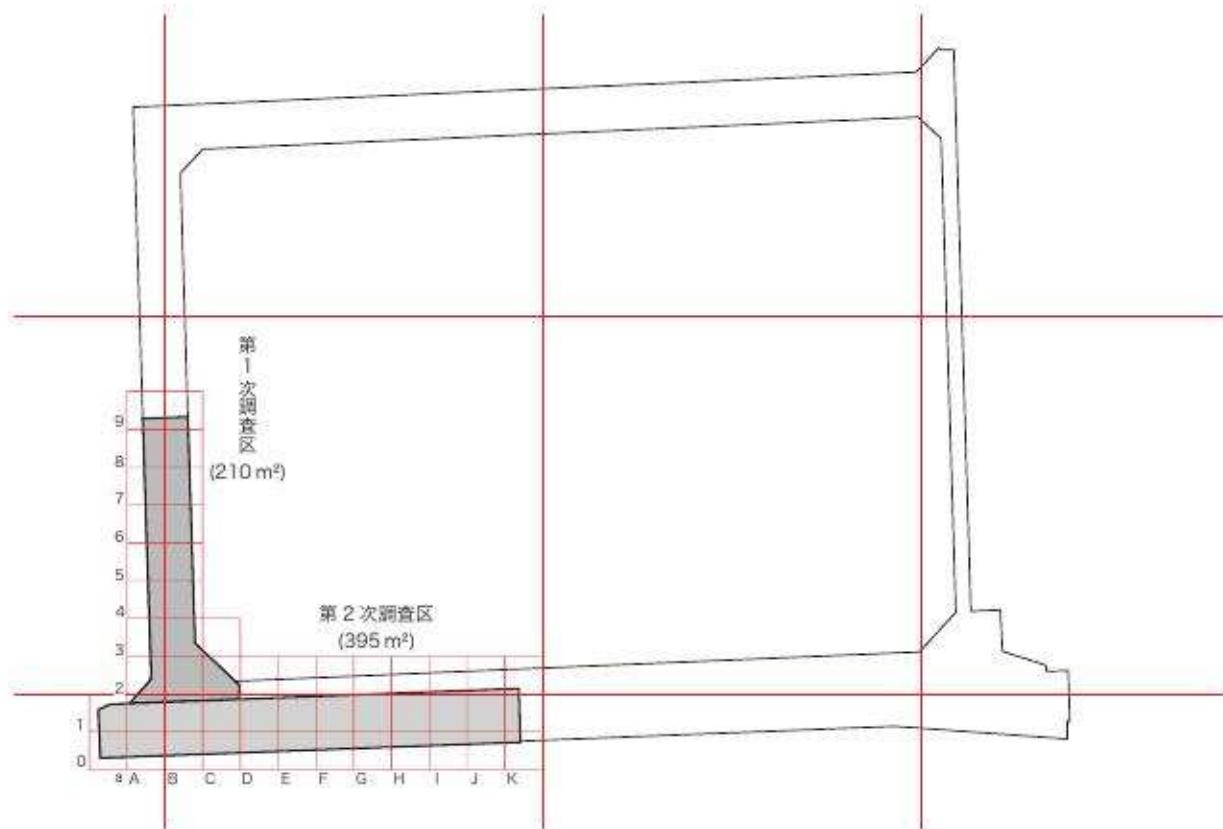
年度	事業(原因)	調査の種別	対象面積m ²	期間	担当者
平成15	(仮称)国府保育園建設用地取得事業	試掘調査(1次)	6,695	着手2004.3.8 完了2004.3.22	津田隆志
平成16	舟見ヶ丘保幼園建設事業に伴う 市道改良工事(市道舟見ヶ丘線)	試掘調査(2次)	1,050	2004.8.10	坂下義視
〃	舟見ヶ丘保幼園建設用地造成工事	立会調査(1次)	—	着手2004.9.21 完了2004.9.22	岩本信一
〃	舟見ヶ丘保幼園建設工事に伴う 市道改良工事(市道古府国府小学校線)	試掘調査(3次)	1,200	2004.10.13	坂下義視
〃	舟見ヶ丘保幼園建設事業に伴う 市道改良工事(市道舟見ヶ丘線)	立会調査(2次)	—	2005.2.15	望月精司
〃	舟見ヶ丘保幼園建設事業に伴う 市道改良工事(市道舟見ヶ丘線)	発掘調査(1次)	210	着手2005.2.21 完了2005.3.22	廣田いずみ 岩本信一
〃	舟見ヶ丘保幼園建設工事に伴う 市道改良工事(市道古府国府小学校線)	立会調査(3次)	—	2005.3.24	岩本信一
平成17	舟見ヶ丘保幼園建設工事に伴う 市道改良工事(市道古府国府小学校線)	発掘調査(2次)	395	着手2005.5.23 完了2005.6.17	宮田明



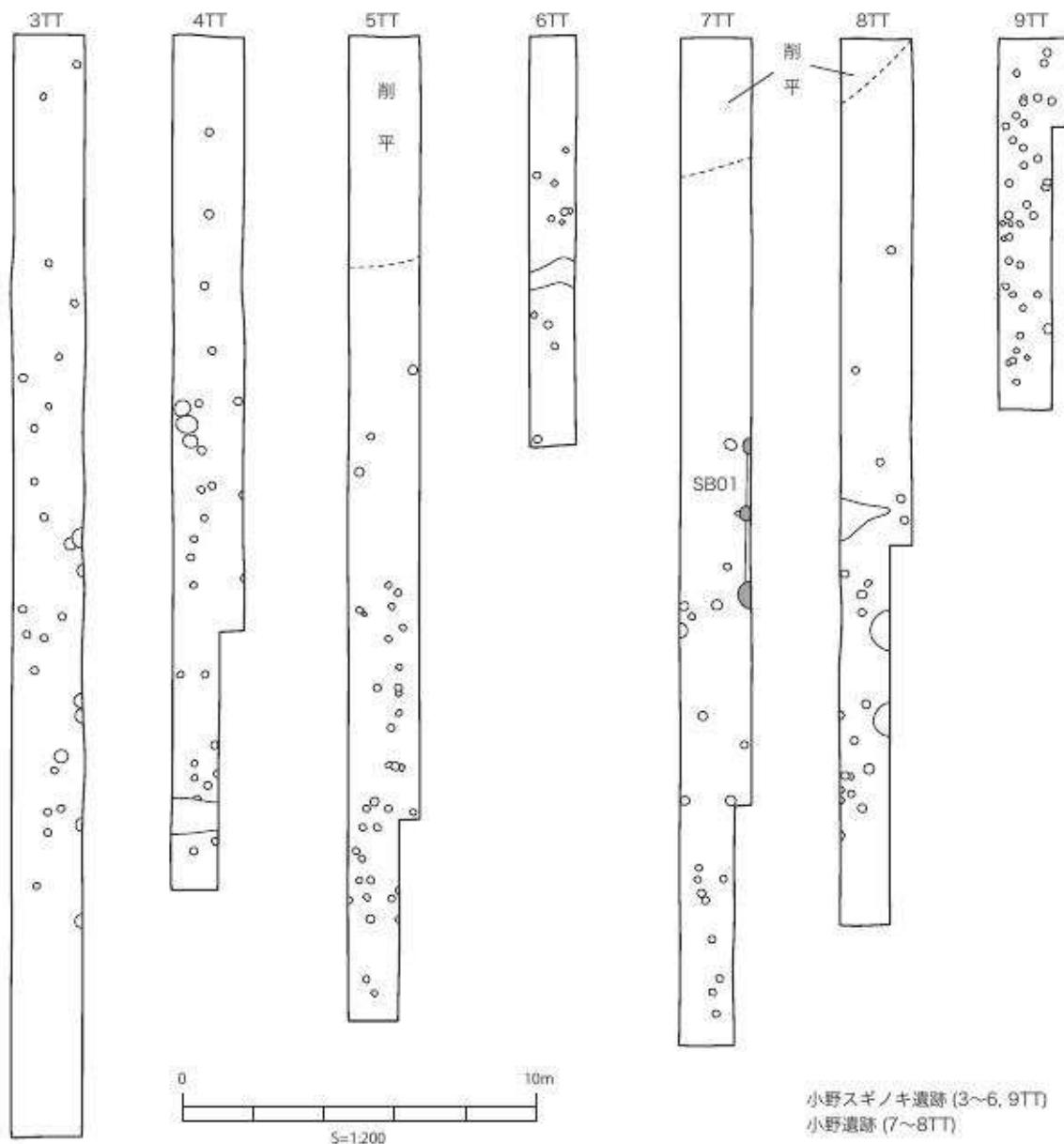
挿図4 調査地位置図



挿図5 試掘調査地点



挿図6 発掘調査地区とグリッド配点図



挿図7 舟見ヶ丘保幼園建設用地試掘トレンチ略図

市道舟見ヶ丘線については、平成15年度の試掘調査で対象から外した資材置場について、計画道路範囲内に試掘坑を設定し、ここで遺構が検出されたことから、210m²について発掘調査対象とした。その他の区間は、平成15年度の試掘調査結果をふまえて、工事立会で対応した。

発掘調査に関しては、平成17年1月28日付で小松市長より依頼文書を受け、健康福祉部児童家庭課より予算の転配当を受けた上で調査室が実施した。着手は平成17年2月21日、完了は同年3月22日、年度末の駆け込み的な日程であった。

発掘調査の結果、調査区の過半は削平されて遺構の検出はなく、試掘調査で溝状遺構と予想された部分は、攪乱坑の一部であったと判明した。遺構は、調査区の南隅で柱穴状のピットが検出されたが建物跡と認定するには至らず、出土遺物も疎らであった。

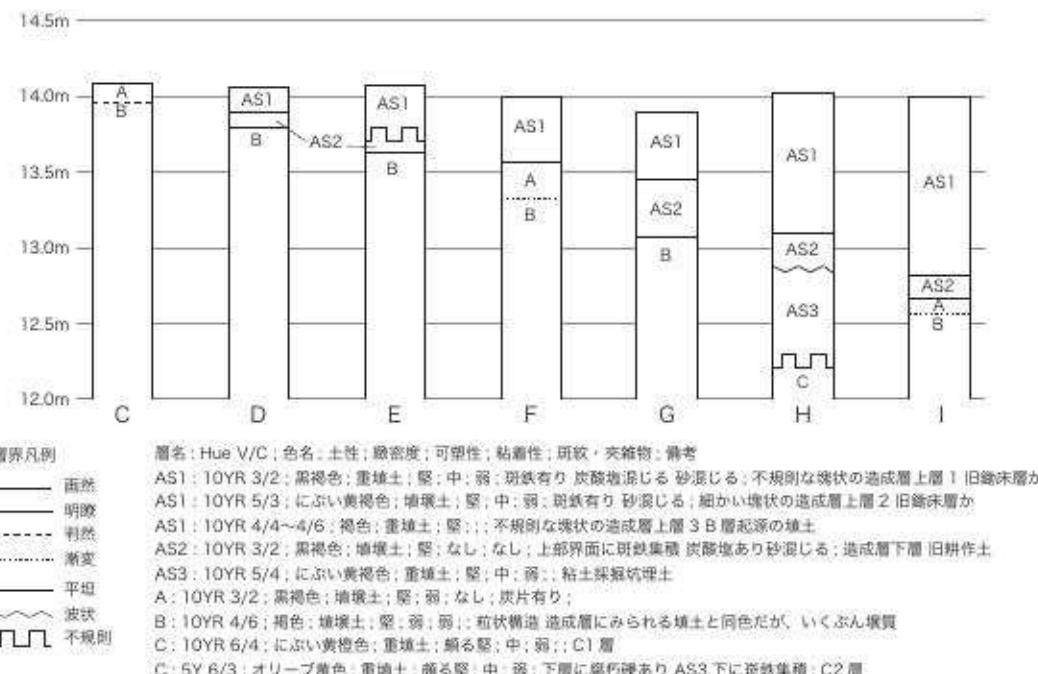
市道古府国府小学校線については、平成17年10月13日の試掘の所見では、西側の

第 2 次 区域について削平の影響は少なく、遺物の出土も確認されたことから、平成 17 年度に発掘調査を計上し、平成 17 年 4 月 12 日付で小松市長より依頼文書を受けて、前年度と同じく健康福祉部児童家庭課より予算の転配当を受けて実施した。

発掘調査の結果、谷にさしかかる斜面であったために削平の影響はさほどではなかったが、区画整理によって階段状に削平された箇所があった。加えて、調査区の東半に限れば、巨大な攪乱坑によって、調査可能範囲は猫の額程度で、この攪乱坑は、地元関係者の証言で、製瓦業者の粘土採掘坑跡と判明した。これが数珠状に連結して 2 箇所確認できた。試掘坑で「谷」とされた場所も、土層は不自然な堆積状況なので、この一部の可能性が高い。しかしながら、谷が存在したことまた事実で、非常に深く、しばしば湛水する水捌けの悪い土地だったという。

出土品整理 出土遺物はやはり疎らで、遺構として掘立柱建物跡 5 棟、その可能性が認められる柱穴列 3 箇所、柱穴 1 基を検出したが、粘土採掘坑と区画整理の影響はきわめて深刻で、建物規模が判明したものはなかった。

出土品整理は、第 2 次調査完了後、9 月に開始した。とりあえず、出土遺物は、攪乱坑から取り上げたものも含めて、古代（平安）、近世～近代、近代窯業関連遺物に整理し、これら全てを報告対象として資料化する作業を実施した。



挿図 8 小野遺跡 2 次調査区南壁セクション土層柱状図

参考文献 (II)

- イ 石川県教育委員会 (1974) 小松市古府しのまち遺跡, p2.
- 石川県立埋蔵文化財センター (1984) 県内遺跡詳細分布調査報告書 I, p10.
- ウ 上野與一 (1958) 寺院址概説, やましろ, p118-120. (註: 吉岡 1991 より註 11 の引用)
- 上野與一 (1970) 考古篇, 小松市史, 小松市教育委員会, p209-211.
- ミ 吉岡康暢 (1991) 加賀, 新修国分寺の研究 3, p265

III 遺構と遺物

1 遺構

SB02・SB03 (図版2)

掘立柱建物

a-0-A-0Grで近接する2基のピットの列を確認した。梁桁は不明だが、柱間の広い方を梁とすると、建物の軸方位は、どちらも西偏約30°。柱間は、梁行き190-200cm、桁行き160cm、ただし、P55は攪乱坑の可能性がある。出土遺物はない。

SB04 (図版3)

C-0-C-1Grで、P39-40-58の柱穴列を確認した。柱痕は不明だが、ピット下底の凹みを柱痕と見なした。ほかのピットは図上での推定である。東側は階段状に削平されていて、遺構は完全に失われている。梁桁は不明で、柱間は210-230cm、建物の軸方位は、西偏約25°または東偏約65°。出土遺物は、P27から須恵器环身片(図版7:6)と土師器小甕(図版7:18)ほかが出土しているが、排水溝掘削中の出土である。

SB05 (図版3)

A-1Grで検出した。梁桁は不明で、柱間は約90cm。建物の軸方位は、西偏約49°または東偏約41°。出土遺物はない。

SB06 (図版4)

F-0Grで攪乱坑の隙間にピットの列を確認した。柱間は160-180cm、建物の軸方位は西偏約3°または東偏約87°。P80は攪乱坑の可能性がある。出土遺物はない。

SB07 (図版4)

I-1GrのP96-97。視覚上は柱穴のように思われるが、攪乱坑の隙間で、断定できない。ほかのピットの相関関係は、現地で検討したが疑問が残る。P104は木痕痕と思われる生痕と一緒に掘り抜いてしまっている。柱間は約90cm。出土遺物はない。

SB08・SB09 (図版5)

グリッドポイントI-1周辺の柱穴と思われるピット群。P109は下底に凹みがある。柱間は110-130cm。出土遺物はない。

P119 (図版5)

E-0Grで検出された。セクションにも柱痕と思われる黒土が見える。梢円形の掘方で、本調査区で最も規模の大きい掘立柱建物跡が想定されたが、検出された柱穴はこれだけだった。出土遺物はない。

SD01 (図版6)

周溝状遺構

A-0-C-0Grにかけて検出された略方形ないし略円形に回る溝状遺構。一辺または直径は約10mになる。セクションを見る限り、溝自体は浅いようだ。出土遺物はない。

2 遺物

遺物は細片が多く情報が断片的なので、属性表は省略し図版に直接表記した。

須恵器 (図版7:1-17)

平安時代の

1-5は壺Bの蓋、6-9は壺AおよびBの身である。6を除いては試掘や造成土の出土である。断片的に見える特徴からは古代V-VI期の範疇で理解される。

10-15 は甕片、16 は瓶片、17 は壺の底部片である。なお、図版に表記した呪目文は、挿図 9 に基づいている。

土師器（図版 7：18）

18 は小甕である。口縁部がなく縦年に照らしにくいが、底部は糸切り痕が見える。

鍛冶関連遺物（図版 7：19-21）

19-21 は腕形鍛冶滓である。21 は粘土質で、ほかはピックアップ磁石にわずかに吸い付くが、鉄塊は含まないようだ。

近世以降の遺物

近世陶磁器（図版 8：22-27）
攪乱坑や造成土から出土した陶磁器や窯業関連遺物は近現代のものが殆どだったが、22-26 は 19 世紀代まで遡る可能性がある染付である。23 を除いては胎土が陶質で、24・25 は釉薬の貢入が著しい。

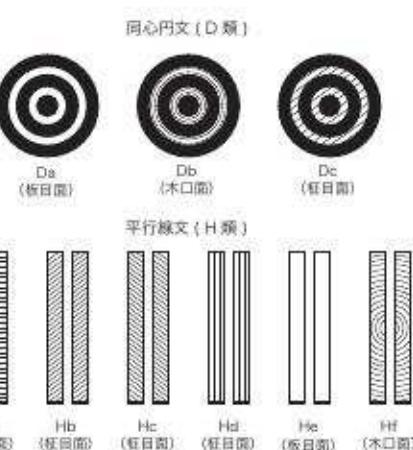
27 は灯明皿である。酸化焰焼成で焼きが甘い。

近代窯業関連遺物（図版 8：28-46）

28-35 はハマである。窯詰めの際に余分な水分の吸収と焼き歪みを防ぐ目的で用いられる窯道具である。38 はサヤで、39 はこれと併せて用いられる台か蓋の類のようだ。

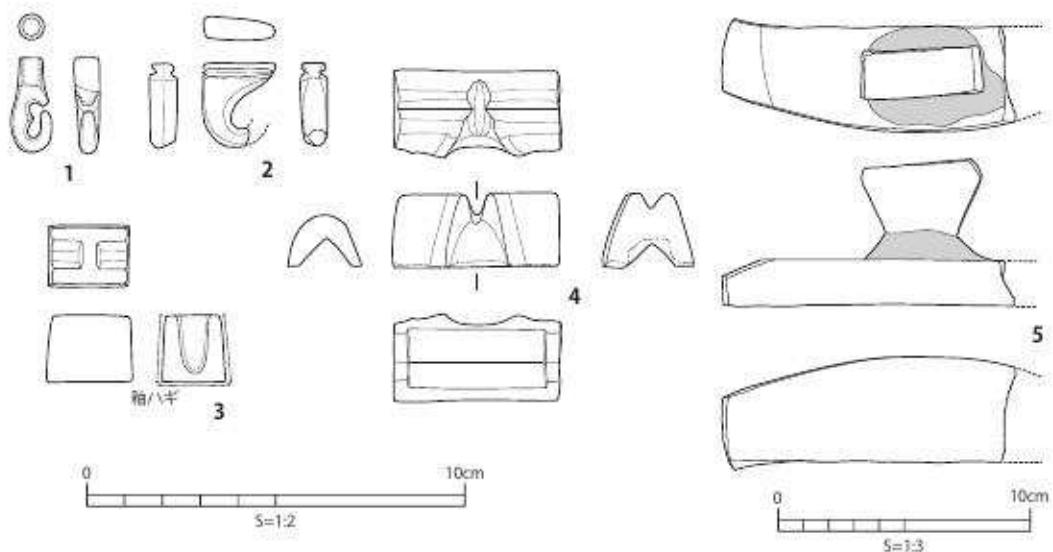
42・43 は蓋モノの容器で、流通品ではないようだが、窯道具としても、窯詰めに使用される物ではないようだ。36・37 はこれの大型品で、近隣の前田利常公灰塚出土例では、内面のヒダが複数ある。44・45 も用途不明だが、口縁部の強度を意識した形態ではあるという。

挿図 10 には特定の窯業製品を集めた。1-4 は、おそらく、戦時中に制作された繊維関係の機械に装着される陶製部品と思われる。鋳込みまたは型打ちで制作された規格品で、1 と 3 が多い。5 は、葺瓦の際、下部の隙間を充填する粘土の押さえに用いられる。



内畠信雄（辰口町教委 1985）に基づき、望月精司（小松市教委 1991）の分類を加筆。格子目文（擬格子目文含む）は「K類」

挿図 9 呪目文様と木目の分類



挿図 10 近代窯業製品（陶製機械部品、葺瓦関連）

IV 平成 13 年度踏査採集遺物

はじめに

市教委埋文調査室では、平成 13-14 年度に市内遺跡の踏査を実施した。第 II 章で触れたとおり、既刊の遺跡地図の追認を目的としたもので、成果品として、平成 15 年度に『小松市遺跡地図』を作製した。本地図作製には、埋蔵文化財取り扱い協議の資料とする明確な目的があり、過去の分布調査・試掘調査の成果も盛り込み、全てを網羅できたわけではないが、これらを色分けする方法で、既刊の遺跡地図との整合性を考慮しつつ、関係する発掘調査報告書も参照して、明らかに誤認と見なされる部分は改訂したものである。実際のところ遺漏も多く、修正が必要な箇所がいくつか明らかになっているが、考古学的に利用する事を想定しておらず刊行物でもないので、作成後も新たな試掘調査結果を盛り込み、その都度改訂を重ねて、現在もそのまま運用している。

本章では、小野遺跡の発掘成果を補足する意味で、上記踏査のうち、国府台地とその周辺で採集した遺物を抄出して報告するものである。

1 採集地点の地区設定

上記踏査は、既刊の遺跡地図の登録されている包蔵地範囲に基づいているが、内容を整理すると、場合によって考古学的に再編する必要がある、と個人的に所感を抱いている。表 3 には、踏査時にタグに記した遺跡名と、本報告で仮称する地区名を併記している。地区名は、『国府村史』と吉岡（1991）を参考資料として、採集地点にもっとも関係が深いと思われる通称地名を冠した。挿図 11 は、遺物採集地点をプロットしたものだが、ここで設定する地区名は省略した。これは、遺物が採取された地点の分布をどうとらえるか微妙なサジ加減が問題となってくるので、報告者の私見をあえて排除した。なお、太字で示したのは周知の遺跡名、細字は現集落が興った当初の地名に最も近いと思われる地名である。そのため、図上では使用可能な旧体字で表示している。

2 各地区の概要

シノマチ地区（挿図 11：1-30, 図版 9：50・51・60）

昭和 48 年の県営ほ場整備（以下、県ぼ）小松東部地区施工区域であり、図上で水田の区画が広い区域が古府町地籍に属する。採取地点の分布は広範にわたり、発掘調査（県教委：報告では試掘を含めて 2 次としているが、ここでは以下、1 次とする。）でもつとも遺物が多いとしてトレンドが設定されたのは、およそ 12-20 付近の排水路である。正報告はないが、吉岡（1991）で「しのまち遺跡」として引用されていて、その後の「古府しのまち遺跡」に敷衍されている。

県ぼでは、十九堂山を土採取して客土工事が施されたと言うことで、採集遺物が耕耘によって地表に露出したものであれば、試掘調査で遺物が出土しなかったとはいえ、耕作層は主に客土であろうから、本来十九堂山に埋蔵されていた遺物を採集している可能性は否めない。発掘調査の報告は概報しか刊行されておらず詳細は不明だが、客土に含まれていたか否かは別として、採取地点の広がりは、県ぼ施工区域に沿うように南北に

広がっている点からすれば、造成の影響と見なすべきだろう。因みに、古府町地内に関しては、昭和33年の区画整理でも客土が入っているという。

採集遺物 採集遺物は殆ど須恵器片で、特徴の明らかなものは壺蓋で9世紀代だが、ほかに若干10世紀代の遺物を含むようだ。甕と思われる厚手の破片は損傷が著しく、工事や耕耘の影響だろう。ほかに、かわらけや珠洲といった中世の遺物も採集された。

坪尻地区 坪尻地区（挿図11：31-40、図版9：48・49・52）

吉岡（1991）で須恵器・土師器出土地点として「ツブ（ボ）ジリ」とされる地点の周辺地区で、『国府村史』では「坪尻」の地名が見える。前者は聞き取りと思われるが、後者にしたがい漢字をあてた。「坪尻」の地名は、字義どおりに解釈すれば「区画の尽きる所」と解され、条里の存在を想起させるものではある。

既往の調査 本地区は、昭和63年の団体営ほ場整備（以下、団ぼ）に係る発掘調査と平成元年の河田排水機場建設に係る発掘調査が実施された地区にあたり、どちらも「古府しのまち遺跡」として発掘調査が実施された。地図上では、上記の県ぼ施工区域でもある。

地図上の鍋谷川左岸に沿って、区画が川に沿っている区域があるが、これは鍋谷川の旧河道で、団ぼに係る発掘調査でも河床と思われる砂層が検出されている。少なくとも明治前期まではここが河道となっていた模様で、現在ここは千代町地籍に属し、団ぼも、事業主体は板津土地改良区である。

団ぼに係る発掘調査（市教委：2次）では、8世紀-10世紀主体の遺物が出土し、若干の月影期の遺物が伴っている。続く排水機場に係る発掘調査（県立埋文：3次）では月影期の大溝が検出され、概ね8世紀代までの遺物が出土した。この時点で、9-10世紀前半主体の1次調査との相違点が指摘されている。

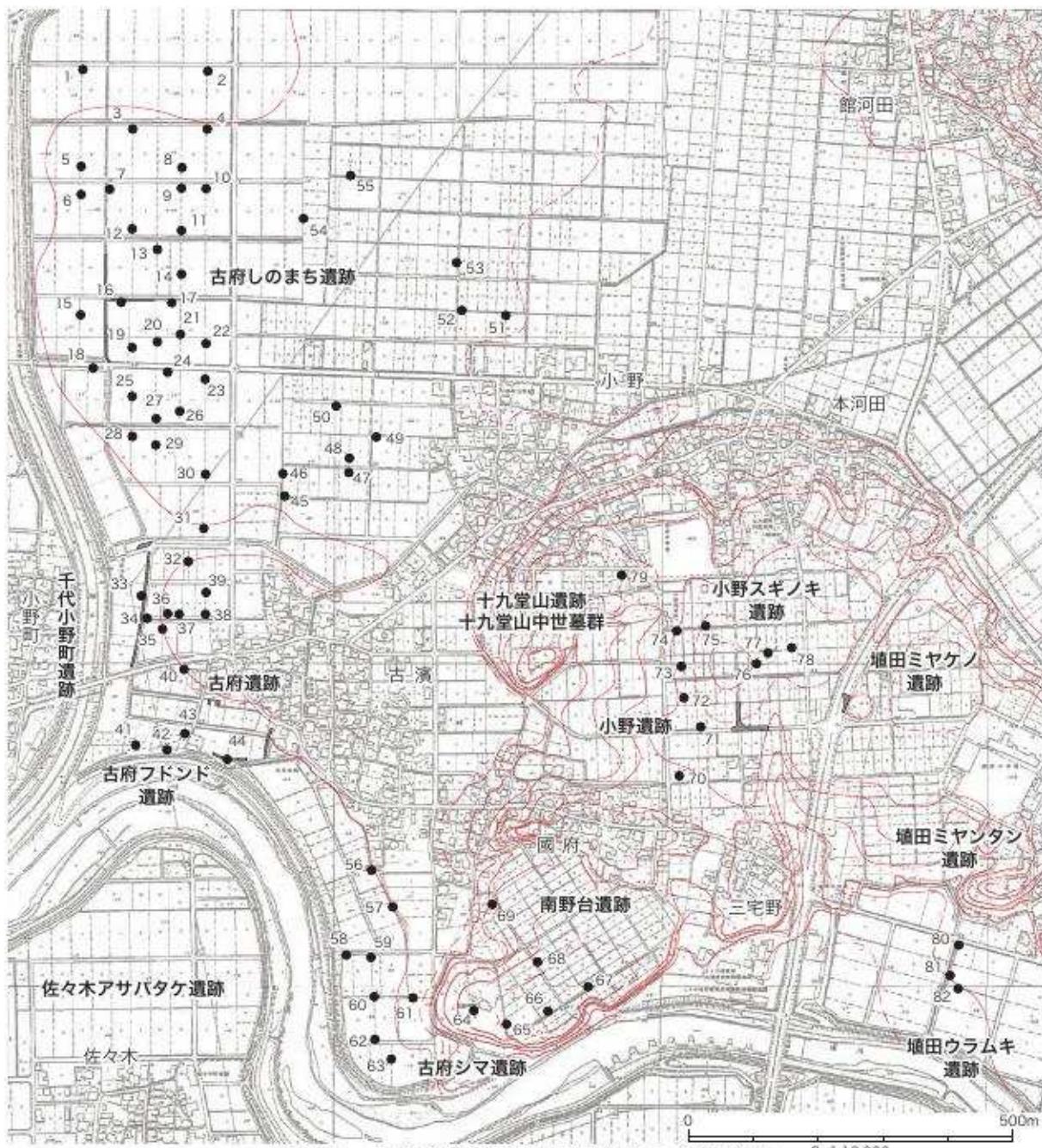
採集遺物 本区域は、排水機場（新堂川）から県道鍋谷和気小松線までの範囲が地図上での一応の目安と考えてよい。33-38のように、主として排水路に沿って遺物が採取され、排水路掘削の影響と見られる。採集された遺物は須恵器片が多く、特徴の明らかなものは壺Bで、他に瓶類と甕がある。概ね9-10世紀と見てよいだろう。また、かわらけや瓷器系（加賀か越前）陶片も採集されている。

不動堂地区 不動堂地区（挿図11：41-44、図版9：47・55・58・61）

吉岡（1991）で、昭和32年に軒丸瓦片が出土したとしてプロットされた地点の周辺で、地元では「フンドド」と訛っているようだ。既刊の遺跡地図に「フンドド遺跡」として梯川と鍋谷川の合流点の堤防にプロットされているが、吉岡（1991）のそれは、現在送電鉄塔が建っている付近にあたる。

既往の調査 本地区は、昭和59年の県ぼ小松東部地区に係る発掘調査が実施された区域の辺りで、「古府遺跡」とされた。調査区は集落西端の水路が鉤状に屈曲する西側に1・2区、南西の民家脇に南北に3区、堤防に沿って東西に4区トレンチが設定された。遺構は1・2区で密度が高いが、報告書の写真で1・2区の状況を見る限り、その他の区域は耕地整理で大部分が削平されていたと見られる。遺物は弥生後期（猫橋期？）から15世紀まで断続的に認められ、主体は9-10世紀とされる。

採集遺物 本区域は、堤防に沿って遺物が採集されている。堤防の盛土に伴うと見てよいだろう。採集された遺物は、須恵器の壺Hがひときわ目立つ。他に、土師器の椀がある。7世紀前半と9-10世紀の2時期に分かれる。ほかに中世の遺物もあった。



挿図 11 平成 13 年度踏査 遺物採集地点 (國府台地)

S=1:10,000

小野地内 A 地区 (挿図 11 : 45-50, 図版 9 : 56)

小野地内 A 地 区

昭和 54-55 年の県立埋文センターの踏査で範囲が拡大された「古府しのまち遺跡」にあたる区域のうち、小野集落の西側の地区である。地図は平成 8 年段階のものだが、小野地内は昭和 30 年代までの耕地整理以降、現在もは場整備未施工であり、今回の踏査は、県立埋文センターのそれとほぼ同じ結果が得られたと考えられる。採集された遺物は、各地点で断面の新しい細片が目立ち、細かく碎かれた破片が散っている状況であったと見なされる。

採集遺物は、甕や瓶類のほか壊 B などがあり、後者の特徴からは、ほぼ 9 世紀代の採集遺物と見られる。

- 小野地内 B** 小野地内 B 地区（挿図 11：51-55, 図版 9：66）
- 地 区** 昭和 54-55 年の県立埋文センターの踏査で範囲が拡大された「古府しのまち遺跡」にあたる区域のうち、小野集落の北側の地区である。
- 採集遺物** 採集遺物は摩滅が著しく、甕片か瓶類と思われる破片と壺 B がある。特徴の明らかなものは 9 世紀代と見られる。他に、近世以降の窯道具（ハマ）が採取されているが、近代窯業関連のものだろう。
- 舟見山地区** 舟見山地区（挿図 11：56-69, 図版 9：53・57・59・62）
石部神社の鎮座するフナミヤマを囲むように周辺で遺物が採取された地区である。フナミヤマは、一般的には「舟見山」の漢字が当てられていて、本報告の小野遺跡発掘調査の原因となった舟見ヶ丘保幼園の名称はこれにちなんだものである。
- 既往の調査** 舟見山の西麓は、県ほ小松東部地区古府工区に係り、県立埋文センターが試掘調査を実施し、昭和 57 年に試掘調査が実施されている。この時に、人工的な堀割の可能性のある地形が指摘されているが、いわゆる「一夜ノ堀」の一部の可能性は留保してよいだろう。ここは保存措置が講じられ、現在「古府シマ遺跡」として遺跡地図に登録されている。舟見山の東側は、南野台地と通称され、昭和 30 年頃に縄文時代晩期の土器が採集されたという。上記試掘調査では、耕地整理ですでに削平を受けていて、耕土直下は地山だったとしているが、部分的に高密度の遺構と遺物の埋蔵している状況があったとされ、緑釉・灰釉陶器、青磁、白磁等、12 世紀以降中世に跨る時期の遺物も確認されている。今回の踏査で遺物が採集された範囲は、この試掘結果を追認する恰好になっている。試掘結果にしたがえば、府南社に関連する一連の遺跡と考えられる。
- 本地区と不動堂地区の間は、少なくとも明治前期までは梯川の河道となっていた模様で、上記試掘調査でも河床と思われる砂層が確認されている。「シマ」という通称名は、舟見山の麓にせり出す河原の、往時の地形に由来するものだろう。
- 採集遺物** 採集された遺物は、須恵器、土師器が中心で、見るべき特徴が乏しいが、土師器の中に内黒となる破片があり、9-10 世紀代と見られる。他に、中世の遺物として珠洲播鉢と青磁がある。
- スギノキ** スギノキ地区（挿図 11：70-78, 図版 9：54・65）
- 地 区** 本報告の小野遺跡発掘調査区の周辺で、昭和 54-55 年の県立埋文センターの踏査で遺物の散布が確かめられた。「スギノキ」の通称名は聞き取りによるものと思われるが、『国府村史』によれば、前田利常公灰塚供養のために周間に植林された杉を藩政期に「御花杉」と呼び、灰塚の東側、埴田町地内で「五本杉」または「スギナイ（杉苗）」という地名が残っているという。本地区の「スギノキ」は、「御花杉」にまつわる通称の一つであろう。
- 本地区は国府台地では最高所となる丘で、十九堂山、三宅野・国府集落はそれぞれ谷で分かたれ、ここと鞍部で連結されるような地形であったようだ。ここには「北野」と称する三角点が近年まで存在したが（現在は廃止されている）、丘の通称地名ではないようだ。
- 採集遺物** 本地区的遺物採取地点は、地籍上は河田町・古府町地内に跨るが、耕地の区画が大きくなる古府町地内では 1 片も採取されない。遺物は須恵器、土師器が概ね 9-10 世紀代とみられ、中世の遺物として珠洲甕と青磁が採集された。

十九堂山地区（挿図 11：79）

十九堂山

地 区

十九堂山周辺では、ほ場整備の土採取の影響もあり、現在遺物は全く採取されない。県立埋文センターの踏査の報告書では、南側で遺物が容易に採集されるというが、今回の踏査では確認できなかった。辛うじて小野町地内で採取した陶器片は近世以降の所産と思われる。

ウラムキ地区（挿図 11：80-82, 図版 9：63・64）

ウラムキ

本章の主旨からすれば必要ないかもしれないが、挿図 11 の図郭に入っているので概要を述べる。

本地区は、昭和 54-55 年の県立埋文センターの踏査で遺物の散布が確かめられ、「埴田ウラムキ遺跡」として既刊の遺跡地図に登録されている。報告書によれば、西方にしたがって遺物の散布が稀薄になるとされている。

埴田町地内の最初の耕地整理は明治 42 年で、区画整理型の耕地整理としては小松市内では最も早い地区の一つだが、『国府村史』にこの時の状況が述べられていて、これによれば、集落南の「テンヤマ」を削平して周辺に客土工事を施し、地形の起伏を平坦に均してしまったとされる。当時としては近郷に誇るべき美田として讃えているくだりから推すと、かなりの大工事であったことが想像される。

明治前期の梯川河道は、現在の鴨浦橋から北に迂回していたとみられることから、この橋の北側に所在する埴田遺跡の付近のいずれかにあった独立丘と思われる。挿図 11 は図郭からはずれているが、2 頁の挿図 3 を参照されたい。埴田遺跡の域内で平成 13 年 10 月 3 日、工場建設に係り調査室が実施した試掘調査では、河床と思われる疊層を確認した。これがいつのものかは、遺物等が出土しなかったので不明だが、両遺跡とも、耕地整理で客土が施された区域であった可能性が極めて高い。とすれば、両遺跡は「テンヤマ」に本来存在した遺跡の埋蔵遺物が客土とともに移動したものを探集したと考えられる。西方にしたがって稀薄になる散布状況は、造成工事の影響を想起させる。

埴田遺跡の付近は、『国府村史』によれば「カモラ」と通称されていて、「鴨浦」の転訛という。現在の鴨浦橋はこれにちなんだ命名だろう。同書にはほかに「浦川原」なる地名も掲げられていて、「ウラムキ」も「浦向き」を意味するものと思われる。字義どおりに解釈すれば、河道が入り込んでいる場所の周辺に残る通称地名と考えられ、徳橋神社は現在「埴田フルカワ遺跡」として遺跡地図に登録されているが、この「フルカワ」もかつての河道の存在を想起させる通称地名である。

今回の踏査で採集された遺物は、須恵器片と瓷器系（加賀か越前）陶片である。

採集遺物

3 遺物の散布状況について

本章冒頭で「考古学的に再編する必要がある」と述べた部分について、ここで今回の踏査の結果を足掛かりにして、気に掛かった点を挙げてみよう。

国府台地境界で出土する 9-10 世紀代の遺物に関しては、吉岡（1991）をはじめ、加賀国府・加賀国分寺の関連で様々な研究者に言及されていて、もっとも文献が充実しているところは周知のとおりだが、そのほかの時代に関してはあまり俎上に挙がることはない。本報告に係る小野遺跡の周辺については結語に譲るとして、ここではそれ以外の部分を対象とする。

幕末の梯川河道 鍋谷川と梯川の合流点周辺について、「輕海用水誌」に掲載されている慶応3年9月の絵図面では現在とかなり違う河道が描かれている。測図でないが、現在の河道とは明らかに違う。明治維新直前の1867年に当たるこの河道図は、その2年後の明治2年に開始される梯川の川切り直前の状況を最も表している資料となる。板津土地改良区の団ぼに係る古府しのまち遺跡の第2次発掘調査と県ぼ小松東部地区古府工区に係る試掘調査で河床と思われる砂層が検出されたことは上に述べたとおりだが、これは明治期の河川改修前の河道と思われる。ということは、現在の堤防は、その後改修された部分をのぞけば、明治期の一連の河川改修で築かれたものということになる。

古墳時代の遺物 古府しのまち遺跡や古府遺跡の発掘調査では、周辺一帯が著しく削平されていることが明らかになっているが、特に古府遺跡の状況は、かなり大量の土砂が動き取られたと見られる。ここで気になるのは、今回の踏査でいえば不動堂地区の遺物の採集状況で、堤防に沿って、しかもここで採取されたNo.41地点の壺H身の破片は耕耘で地表に露出したものとは思われない。堤防構築に係る土採取であがつたものと考えるのが妥当だろう。古府遺跡の発掘調査時の状況からは、何も残っていない可能性が高い。

現状が堤防とされる遺跡 既刊の遺跡地図によれば、この周辺には現状が「堤防」とされる遺跡がある。すなわち、横地遺跡と千代小野町遺跡である。挿図11の図郭に入る千代小野町遺跡は、挿図3で包蔵地範囲の重複する「散布地」としてあえて省略しているが、古墳時代の散布地とされている。発見は古く経緯も不明だが、おそらく、今回踏査の不動堂地区と同様に堤防の盛土周辺から遺物が採集されたと見られる。対岸の古府しのまち遺跡第2・3次調査では、弥生後期から終末期の遺物が出土しているが、最も目立つのは月影・白江期で、学史的に月影式が古式土師器の範疇だった時期があることを勘案すれば、千代小野町遺跡の広がりとして再評価が必要になるかもしれない。

おわりに

河道に分断された遺跡 千代小野町遺跡は、遺跡か否か自体が疑問視されるにせよ、鍋谷川対岸の古府しのまち遺跡や古府遺跡と一連の遺跡の一部である可能性も残っている。河道の変遷の過程で現河道が分断していると見るのが妥当だろう。同様な例は梯川でも指摘できる。
上小松排水機場の建設に係り、平成4-6年に(社)県埋文保存協会と県立埋文センターが平面梯川遺跡の発掘調査を実施しているが、その対岸の宅地造成に係り、調査室で平成3年11月30日に実施した試掘調査では、弥生時代後期の遺物を確認している。さらに、梯川鉄橋遺跡についても、梯川の河川改修に係り対岸で弥生土器の出土があったとされる。

埋蔵文化財包蔵地と「遺跡」 行政的にやむを得ない部分は致し方ないとして、遺跡自体の評価はなるべくなら、「埋蔵文化財包蔵地」の名称や範囲に縛られることなく、実態に即したものであるべきだと、自戒も込めて考える所である。少なくとも、実態に即して改訂されていく「埋蔵文化財包蔵地」と、改訂によって実態と乖離していく「埋蔵文化財包蔵地」の両者は確実に存在する。つまり、「遺跡地図」には情報のダイジェスト版として利用できない部分がある。本章であつかった国府台地界隈の遺跡群は、さて、どちらに転ぶだろう。

表3 平成13年度踏査採集遺物一覧(抄)

No	遺跡名(踏査時)	地点	地籍	地区名(本報告)	図版	図番	遺物	備考
1	古府しのまち	T	古府町	シノマチ			須恵器(坪A・B)	古代(9世紀)
2	古府しのまち	U	古府町	シノマチ			須恵器(坪B)	古代
3	古府しのまち	R	古府町	シノマチ			須恵器(要)	不詳
4	古府しのまち	P	古府町	シノマチ			古式土師器(壺)、須恵器(坪B、要ほか)	古墳(4世紀)、古代(9世紀)
5	古府しのまち	S	古府町	シノマチ			須恵器(坪B)	古代
6	古府しのまち	J	古府町	シノマチ			須恵器(坪G)	古墳(7世紀)
7	古府しのまち	K	古府町	シノマチ			須恵器(坪)	古代
8	古府しのまち	Q	古府町	シノマチ			須恵器(坪B)、かわらけ	古代、中世
9	古府しのまち	N	古府町	シノマチ			須恵器	不詳
10	古府しのまち	O	古府町	シノマチ			須恵器(要ほか)	不詳
11	古府しのまち	M	古府町	シノマチ			須恵器(坪B、輪?)ほか	古代(9~10世紀)
12	古府しのまち	L	古府町	シノマチ			須恵器(輪?)	古代(9~10世紀)
13	古府しのまち	I	古府町	シノマチ			須恵器(輪?)	不詳
14	古府しのまち	H	古府町	シノマチ			須恵器(坪Aほか)	古代
15	古府しのまち	A	古府町	シノマチ			須恵器(坪)	不詳
16	古府しのまち	B	古府町	シノマチ			須恵器(要、瓶頸)、土師器、かわらけ	古代(9世紀)、中世
17	古府しのまち	E	古府町	シノマチ			須恵器(瓶頸)	古代(9~10世紀)
18	古府しのまち	II	古府町	シノマチ			須恵器(要)	不詳
19	古府しのまち	C	古府町	シノマチ			須恵器(坪ほか)、土師器	不詳
20	古府しのまち	D	古府町	シノマチ			須恵器(要)	不詳
21	古府しのまち	F	古府町	シノマチ			須恵器(坪B、瓶頸)	古代(9世紀)
22	古府しのまち	G	古府町	シノマチ			須恵器(坪A、瓶頸ほか)、土師器、珠?	古代、中世?
23	古府しのまち	3	古府町	シノマチ			須恵器	不詳
24	古府しのまち	10	古府町	シノマチ	9	60	須恵器、珠(要)	中世
25	古府しのまち	Z	古府町	シノマチ	9	50	須恵器(坪A・B、要ほか)、珠?	古代(9~10世紀)、中世?
26	古府しのまち	2	古府町	シノマチ			須恵器(坪Bほか)	古代(9世紀)
27	古府しのまち	1	古府町	シノマチ			須恵器	不詳
28	古府しのまち	Y	古府町	シノマチ			須恵器(坪Aほか)	古代
29	古府しのまち	X	古府町	シノマチ	9	51	須恵器(坪B)	古代(9世紀)
30	古府しのまち	W	古府町	シノマチ			須恵器(坪B)	古代(9世紀)
31	古府しのまち	V	古府町	坪尻			須恵器	不詳
32	古府しのまち	18	古府町	坪尻			須恵器(瓶頸)	古代(9~10世紀)
33	古府しのまち	12	千代町	坪尻			須恵器(坪、要)、かわらけ	古代、中世
34	古府しのまち	15	古府町	坪尻	9	48	須恵器(坪B)	古代(9世紀)
35	古府しのまち	13	古府町	坪尻			須恵器(要)、土師器	不詳
36	古府しのまち	14	古府町	坪尻	9	52	須恵器(要)	不詳
37	古府しのまち	16	古府町	坪尻	9	49	須恵器(坪Bほか)	古代(9世紀)
38	古府しのまち	17	古府町	坪尻			須恵器(要)	不詳
39	古府しのまち	19	古府町	坪尻			須恵器(瓶頸)	古代(9~10世紀)
40	古府	B	古府町	坪尻			須恵器(坪B)、土師器、資源系	古代(9世紀)、中世
41	古府	A	古府町	不動堂	9	47, 55, 61	須恵器(坪H、要ほか)、土師器、珠(要)	古墳(7世紀)、古代、中世
42	古府	D	古府町	不動堂			須恵器、土師器	不詳
43	古府	C	古府町	不動堂	9	58	須恵器(坪B)、土師器(要)	古代(9~10世紀)
44	古府	E	古府町	不動堂			須恵器(要)	不詳
45	古府しのまち	8	小野町	小野地内A			土師器	不詳
46	古府しのまち	7	小野町	小野地内A	9	56	須恵器(坪B、瓶ほか)ほか	古代
47	古府しのまち	4	小野町	小野地内A			須恵器(坪)	古代(9世紀)
48	古府しのまち	5	小野町	小野地内A			須恵器(坪A)	古代(9世紀)
49	古府しのまち	20	小野町	小野地内A			須恵器(坪、要ほか)	古代(9世紀)
50	古府しのまち	21	小野町	小野地内A			須恵器(坪)	古代

No	遺跡名(調査時)	地番	地籍	地区名(本報告)	図版	図番	遺物	備考
51	古府しのまち	24	小野町 小野地内B				須恵器(环、鏡、瓶類)	不詳
52	古府しのまち	23	小野町 小野地内B				須恵器(环), 磁付ほか	古代、近世以降
53	古府しのまち	26	小野町 小野地内B				須恵器(鏡)	不詳
54	古府しのまち	27	小野町 小野地内B	9	66		常道具(ハマ)	近世以降
55	古府しのまち	25	小野町 小野地内B				須恵器(环)	古代(10世紀)
56	古府シマ	G	古府町 舟見山				青磁	中世
57	古府シマ	H	古府町 舟見山				染付?	近世以降
58	古府シマ	C	古府町 舟見山				須恵器(瓶類), 土師器	古代
59	古府シマ	F	古府町 舟見山	9	59		土師器	不詳
60	古府シマ	E	古府町 舟見山				須恵器	不詳
61	古府シマ	A	古府町 舟見山				土師器	古墳
62	古府シマ	D	古府町 舟見山				土師器	不詳
63	古府シマ	B	古府町 舟見山				須恵器	不詳
64	南野白	A	古府町 舟見山				土師器	不詳
65	南野白	B	古府町 舟見山				須恵器, かわらけ?	不詳, 中世?
66	南野白	C	古府町 舟見山				土師器(内側), 瓷器系	古代(9~10世紀), 中世
67	南野白	D	古府町 舟見山				須恵器, かわらけ	不詳, 中世
68	南野白	E	古府町 舟見山	9	53, 62		須恵器(鏡), 青磁(瓶類)	不詳, 中世
69	南野白	F	古府町 舟見山	9	57		須恵器(瓶類)	古代
70	小野	A	古府町 スギノキ				須恵器(横彫?, 鏡)	不詳
71	小野	E	古府町 スギノキ	9	54		須恵器(鏡)	不詳
72	小野	B	河田町 スギノキ				須恵器(环B, 鏡)	古代(9世紀)
73	小野	C	河田町 スギノキ				須恵器(环)	古代
74	小野	D	古府町 スギノキ	9	65		土師器(内側), かわらけ, 瓷器系, 陶器(肥前系?)	古代(9~10世紀), 中世, 近世以降
75	小野スギノキ	A	河田町 スギノキ				須恵器(环B, 鏡), 磁板ほか	古代(9~10世紀)
76	小野スギノキ	B	河田町 スギノキ				陶器(肥前系?)	近世以降
77	小野スギノキ	C	河田町 スギノキ				須恵器(鏡)	不詳
78	小野スギノキ	D	河田町 スギノキ				須恵器(鏡)	不詳
79	十九筋山	A	小野町 十九筋山				陶器	近世?
80	植田ウラムキ	A	植田町 ウラムキ				須恵器	不詳
81	植田ウラムキ	C	植田町 ウラムキ				瓷器系	中世
82	植田ウラムキ	B	植田町 ウラムキ	9	63, 64		瓷器系	中世

参考文献(III・IV)

- イ 石川県教育委員会(1974) 小松市古府しのまち遺跡
 石川県教育委員会(1992) 石川県遺跡地図
 石川県立埋蔵文化財センター(1984) 県内遺跡詳細分布調査報告書 I, p9-12.
 石川県立埋蔵文化財センター(1987) 小松市古府遺跡
 石川県立埋蔵文化財センター(1991) 古府しのまち遺跡発掘調査報告
- 力 軽海用水誌編纂委員会(1996) 軽海用水誌, 小松東部土地改良区, p262-269.
- コ 国府村史編纂委員会(1956) 部落史, 国府村史, p345-427.
 小松市教育委員会(1991) 戸津古窯跡群 I, p116.
 小松市教育委員会(1995) 古府しのまち遺跡
- タ 辰口町教育委員会(1985) 辰口町湯屋古窯跡, p107-115.
- ヨ 吉岡康暢(1991) 加賀, 新修国分寺の研究 3, 吉川弘文館, p270.

V 結 語

本遺跡は、国府台地の中央部に位置し、加賀国府に比定するとすれば最も可能性が高いと目されている位置に所在している。県立埋文センターの踏査で確認されてから今回の発掘調査に至るまでは「散布地」だった。そういう意味で、今回の発掘調査の最大の成果は、掘立柱建物跡を検出したことだろう。柱穴自体は底が辛うじて引っかかっただけで、しかも、建物の括りとして疑問点は否めないにせよ、一定の柱間と軸方位をもつて複数のピットが並んでいる可能性が示唆される。少なくとも、「集落跡」として具体的な属性を与えることは可能だろう。

これら遺構の時期を比定しうる遺物が出土した遺構はP27のみだが、惜しむらくは、調査着手時の排水溝に掛かってしまった。さらに、SB04の柱穴の一つとはしているが、調査区をまたいでおり、現地で確認したわけではなく、あくまで図上での推定にすぎない。数えるほどしか出土しなかった遺物は、殆どが造成土からの出土であったが、特徴の明らかなものは概ね古代V～VI期、すなわち9～10世紀代の範疇で理解される。国府台地界隈で最も普遍的に表採される遺物の年代にも符合する。これら建物群は、SB02・03のように建て替えを想起させる重複例や複数の軸方位の存在から、单一時期のものではないと見られる。

今回の発掘調査結果で明らかになった点を挙げるとすれば、想像以上に遺跡の破壊が深刻であったことと、断片的な出土遺物は9世紀代を遡らないと見なされることである。すなわち後者は、梯川流域の集落遺跡群で指摘されている趨勢に乗っていると予察される。換言すれば、その性格は不明にしても、加賀立国時期以降に関わる遺跡である。既往の知見を超えるものでなく、これらを追認するにしても、資料が乏しい結果となった。

では、これらの所見を国府台地界隈の遺跡群に敷衍すると、9～10世紀代の遺物が特に多く採集される状況はどう解釈されるだろう。

県ぼに係る古府遺跡の発掘調査では、この時期が遺跡のピークとされている。本遺跡の発掘調査では、殆どが造成土中の出土とはいえ、少なくとも台地上ではこの時期の遺跡は確実に存在した。周辺の踏査では、河岸の堤防周辺は除外するとしても、特に包含層遺物が上がりやすい排水路周辺の状況から判断すれば、地図上にプロットされた状況は、ある程度地点にまとまりをもった散布状況を呈していると見なされる。発掘調査に係れば、それなりの成果は期待できる状況は残されていると見てよいだろう。相関性の指摘できる一連の遺跡群かもしれないが、いずれの遺跡も事實上は耕作土が遺物包含層になっていたと見られるだけに、耕地整理施工後では踏査のみの所見で包蔵地範囲を画定することもおぼつかない事実は率直に認めなければならない。しかも、古府しのまち遺跡の遺物散布状況は、県ぼの施工でかなりの破壊があった事実を示唆しているといわざるを得ない。経験的にいって、小松市域では全般に陸化した後の沖積層の堆積は稀薄で、遺跡は殆ど埋没しないまま複数の時代が重複している。

梯川デルタの特性でいえば、掃流力の弱い梯川の流域では陸化が鈍く、しかも自然堤防もあまり発達しない。集落の立地できる領域が限られることから、漆町遺跡を始め、梯川中流域に集中する古墳時代～中世にかけての「大規模な」集落遺跡群は、こうした

発掘調査の
成 果

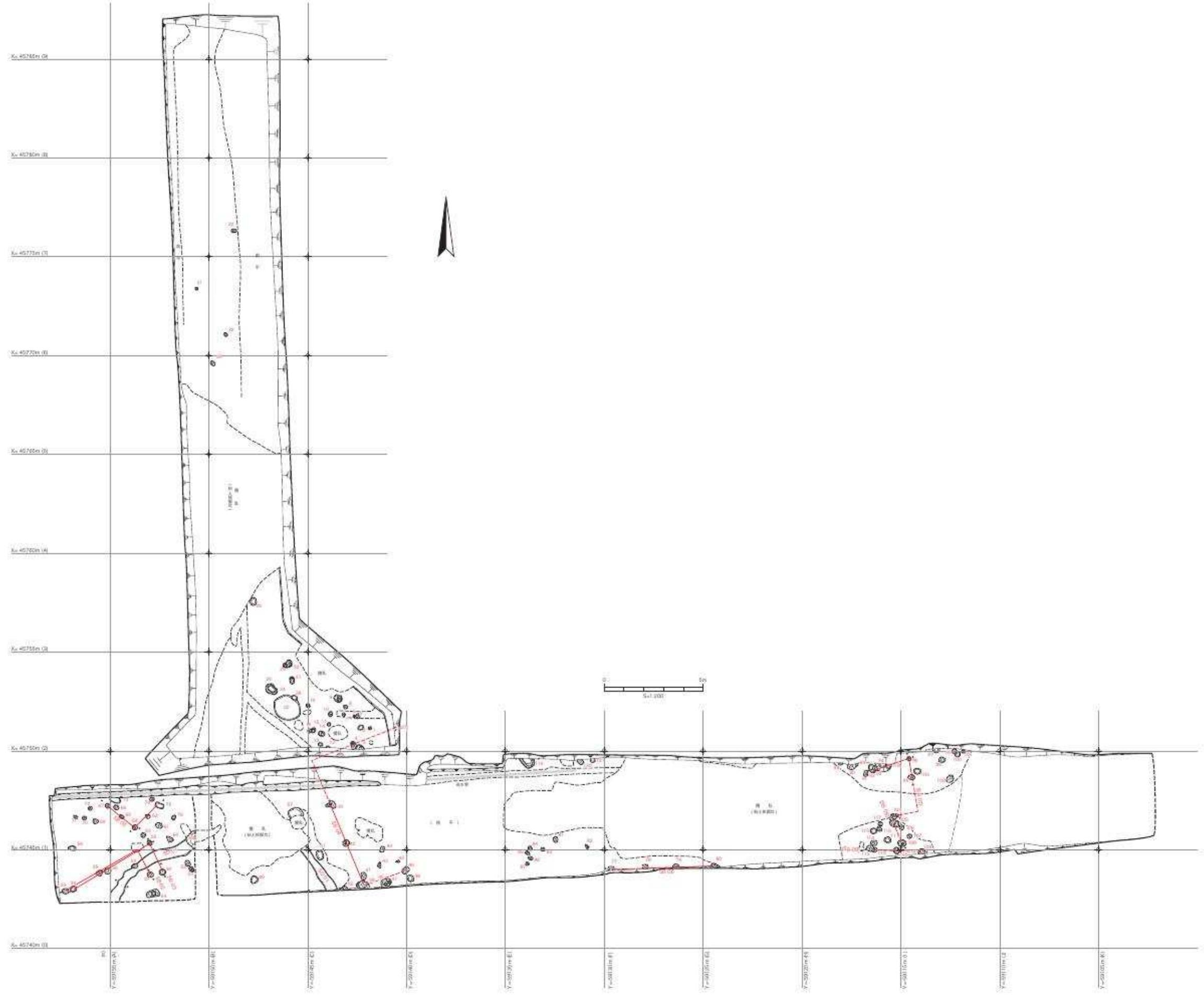
国 府 台 地
界隈の遺跡

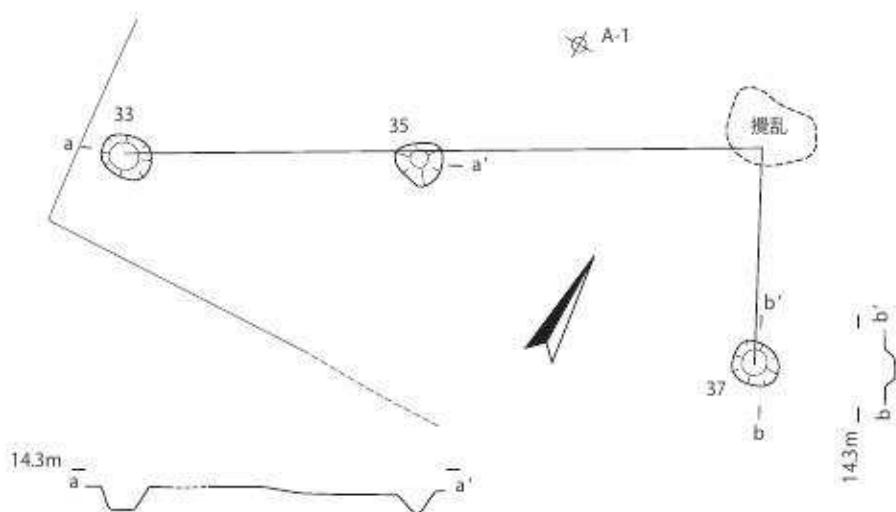
遺跡分布の
地理的特性

地形的な特性を反映している。こうした領域の中心に国府台地は所在するわけだが、不思議なことに、台地上では、南野台遺跡の縄文時代晚期のような一部の例外をのぞいて9世紀を遡る資料がない。近代以降の各種土木工事の影響も勘案しなければならないが、国府台地の特徴ではある。

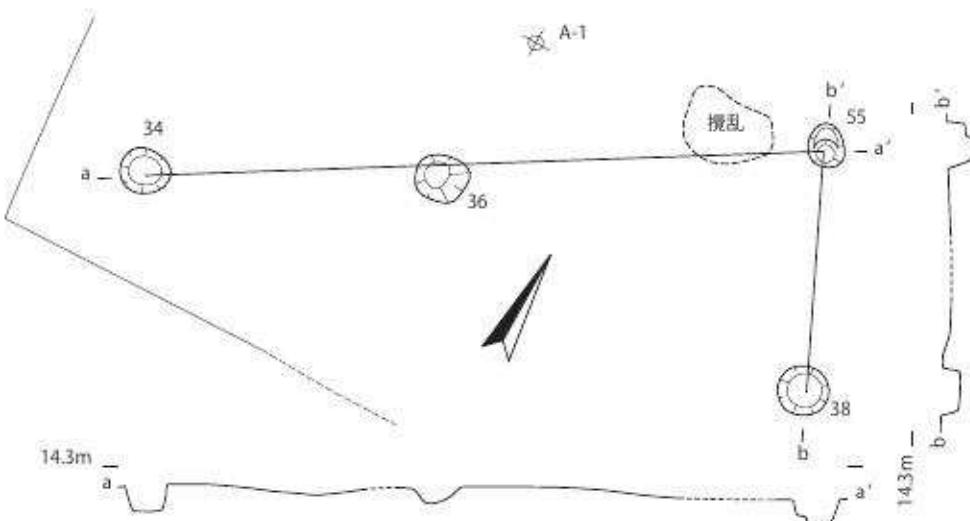
耕地整理の影響は？ 結局のところ、既往の知見をそのままなぞっているだけかもしれないが、最後にあえて付け加えれば、前章で埴田ウラムキ遺跡についてその可能性を指摘したように、耕地整理の客土工事に係る遺跡の誤認はないか十分配慮して、遺跡そのものは慎重を期して取り扱わなければならないことも、肝に銘じておかなければならぬだろう。削平と攪乱ばかりでは、モチベーションを維持するのも一苦労だが、厳しい条件であるが故に緻密な調査は重要である。

図版 1 小野遺跡 平面図

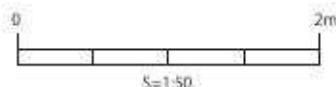




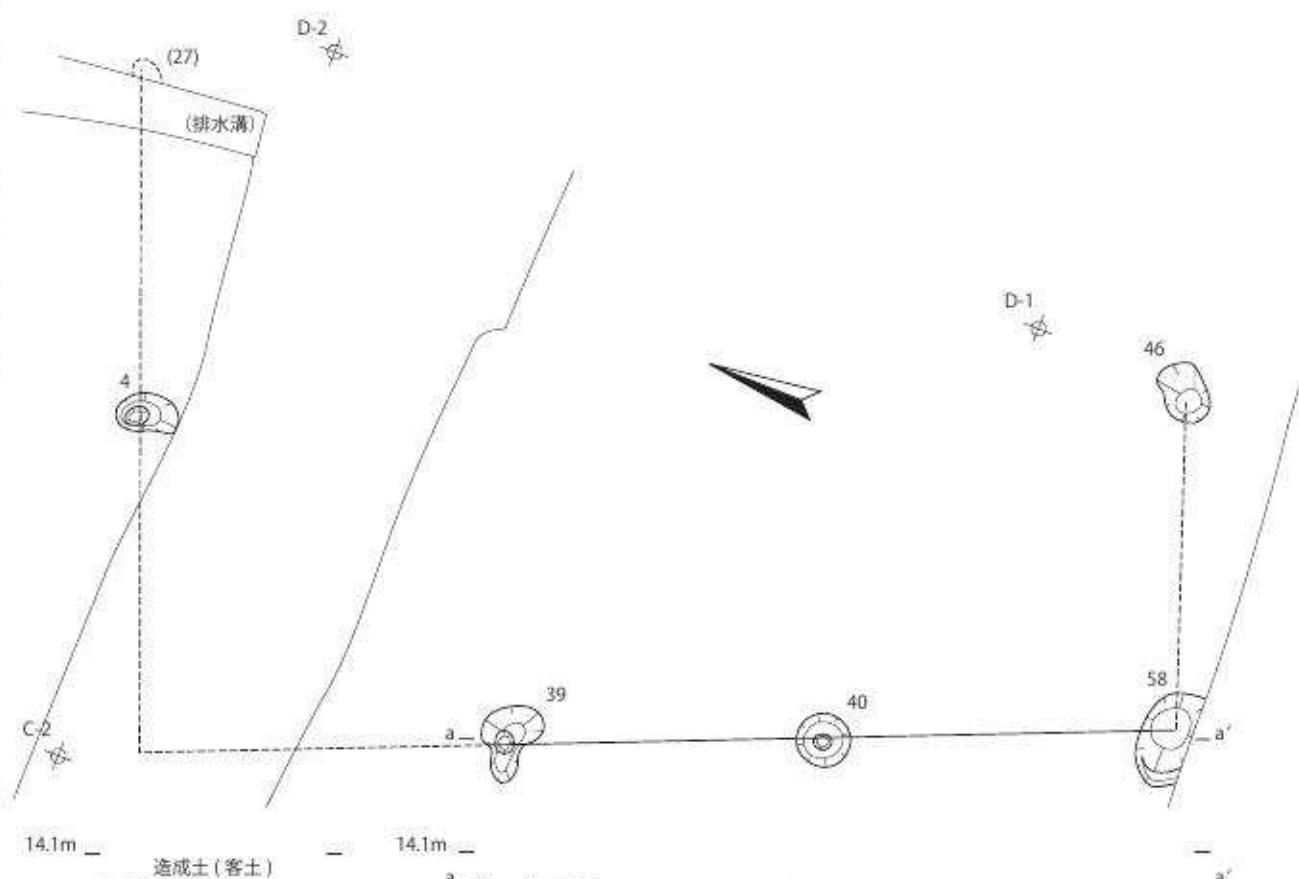
SB02



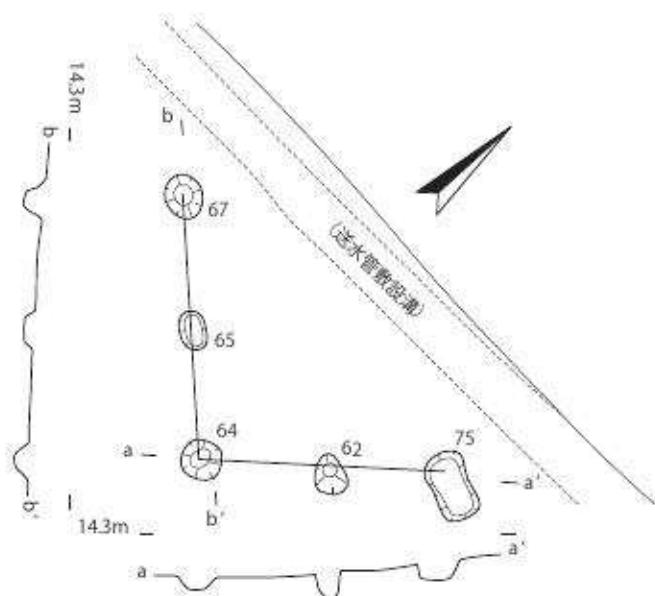
SB03



図版3
掘立柱建物跡実測図
2

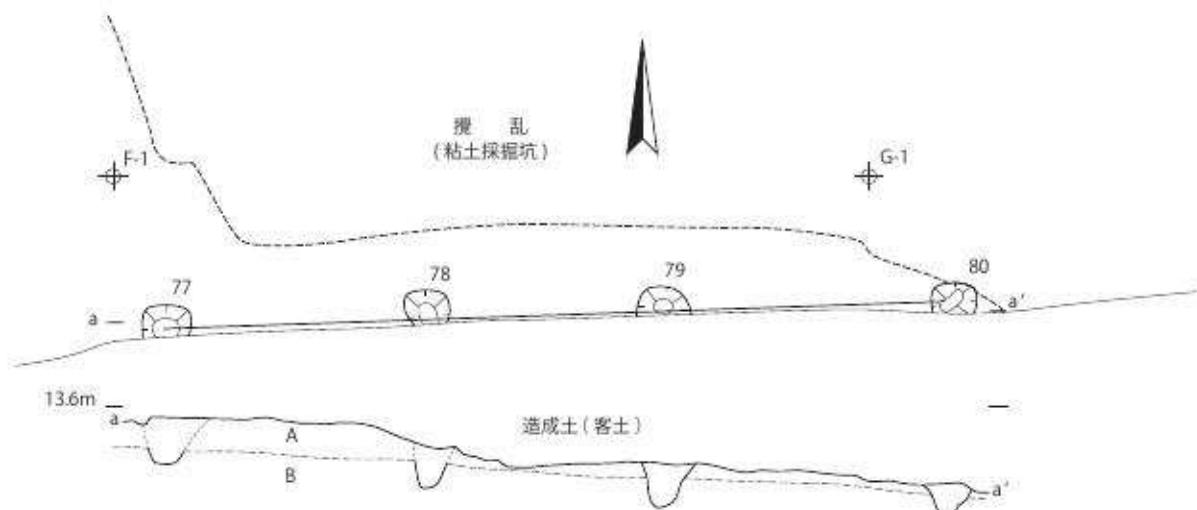


SB04



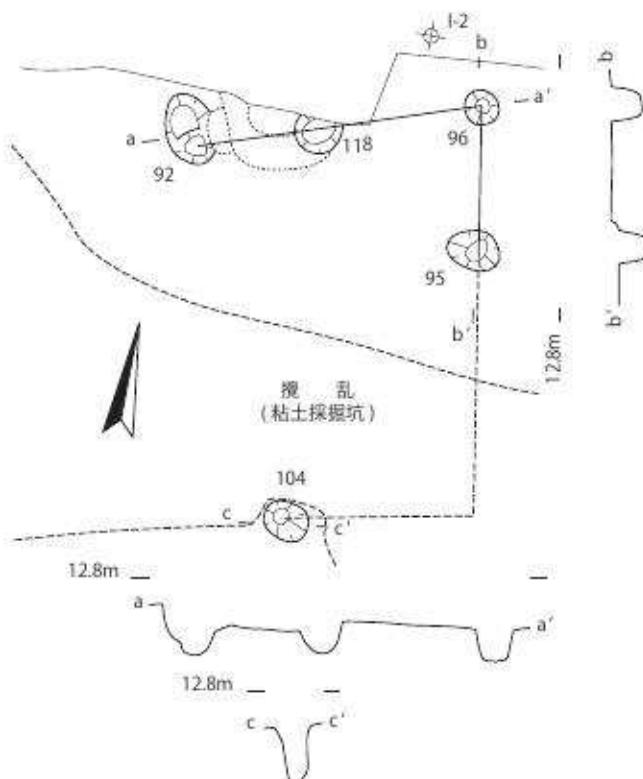
0 2m
S=1:50

SB05

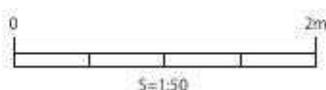


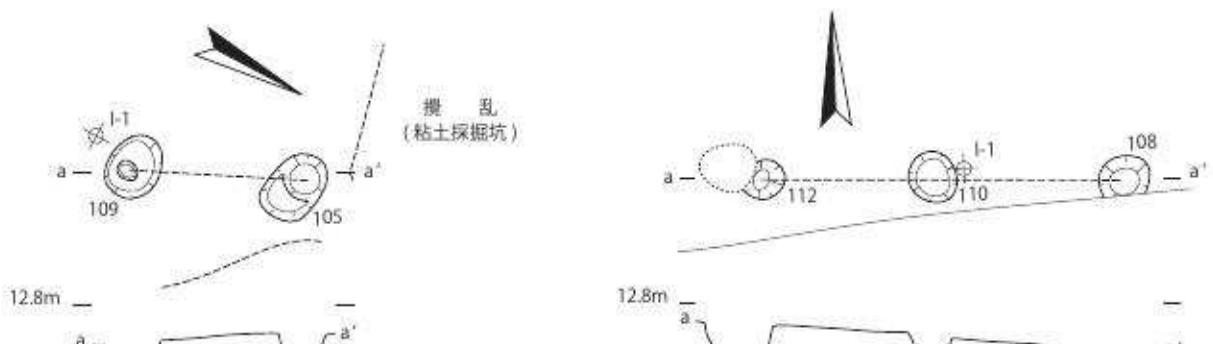
層名: Hue V/C; 色名: 土性; 繊密度; 可塑性; 粘着性; 斑紋・夾雜物; 備考
 A: 10YR 3/3; 暗褐色; 塗壤土; 堅; なし; なし; 炭酸塩有り; 造成土界面に斑鐵集積層
 B: 10YR 4/6; 褐色; 塗壤土; 堅; 弱; なし;
 (柱穴土層注)
 77: 10YR 3/3; 暗褐色; 塗壤土; 堅; 弱; なし; 炭片混じる B 塗土塊有り;
 78: 10YR 3/2; 黒褐色; 塗壤土; 堅; なし; なし; 炭片有り B 塗土粒有り;
 79: 10YR 3/3; 暗褐色; 塗壤土; 堅; 弱; 弱; 炭片有り B 塗土粒有り;
 80: 10YR 3/3; 暗褐色; 塗壤土; 堅; 弱; なし; 炭片有り B 塗土粒有り;

SB06



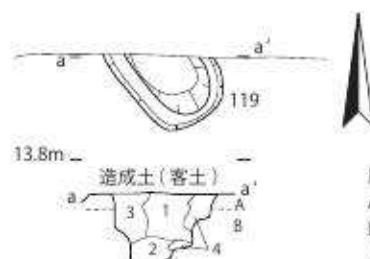
SB07





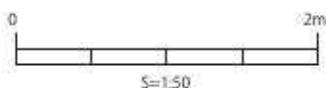
SB08

SB09



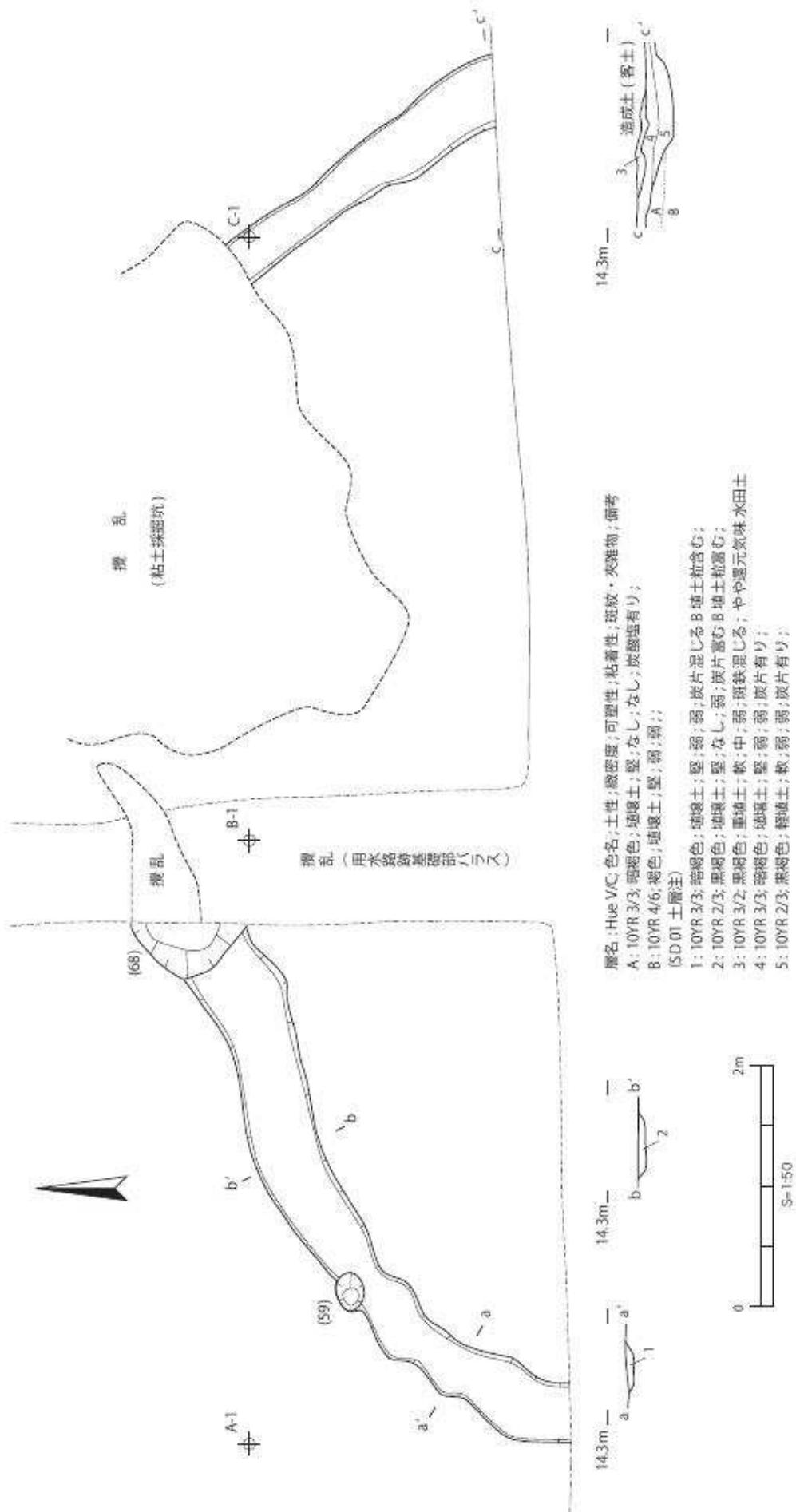
P119

層名: Hue V/C; 色名: 土色; 繊密度: 可塑性; 粘着性; 斑紋・夾雜物; 備考:
 A: 10YR 3/3; 暗褐色; 塗壤土; 堅; なし; なし;;
 B: 10YR 4/6; 深褐色; 塗壤土; 堅; 弱; 弱;;
 (P119 土層注)
 1: 10YR 3/3; 暗褐色; 塗壤土; 堅; 弱; 弱;; 柱痕
 2: 10YR 3/2; 黒褐色; 塗壤土; 堅; 中; 弱;; 柱痕
 3: 10YR 3/2; 黒褐色; 塗壤土; 堅; 弱; 弱;; 掘方埋土
 4: 10YR 3/3; 暗褐色; 塗壤土; 堅; 弱; 弱;; 掘方埋土

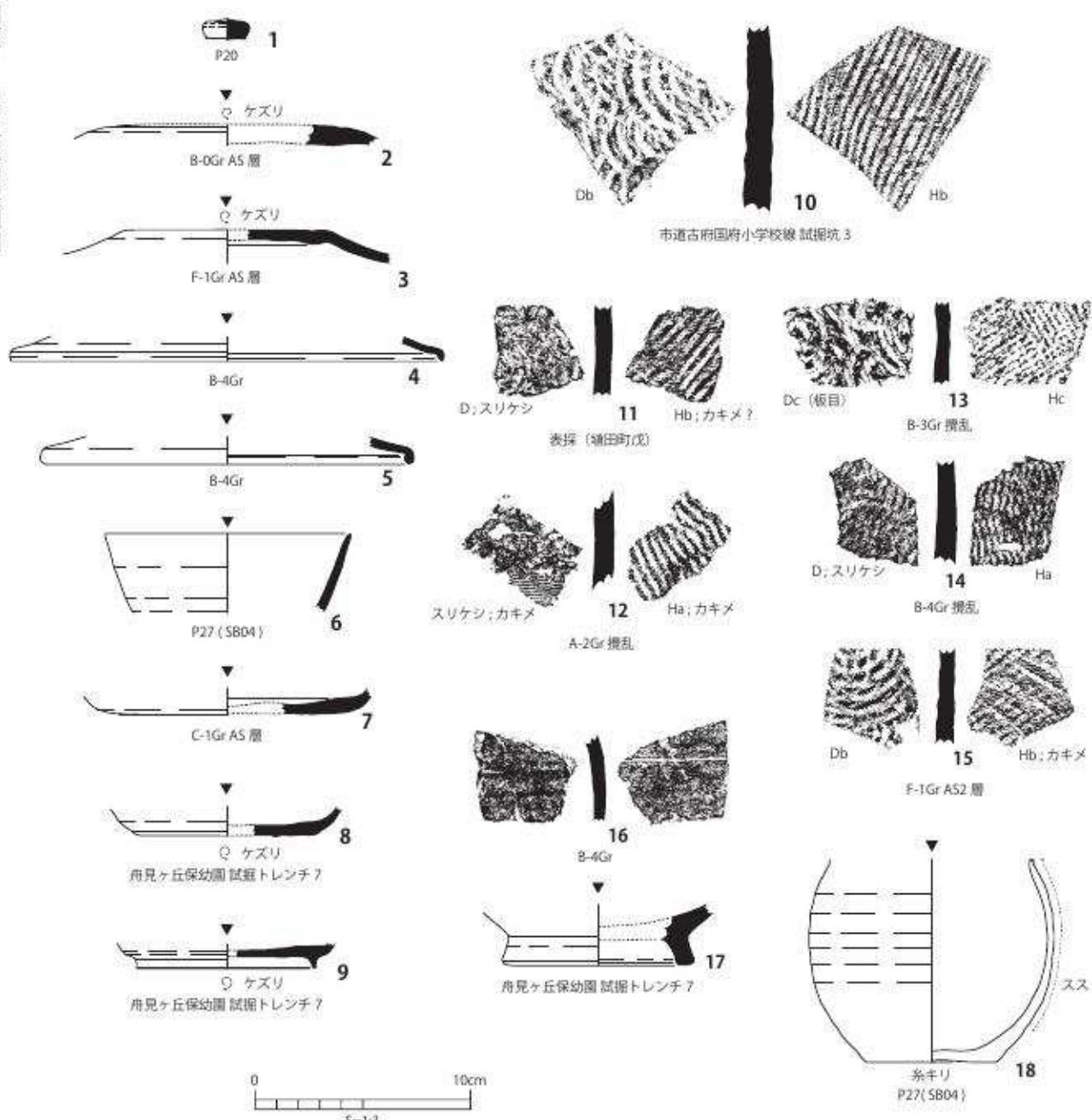


S=1:50

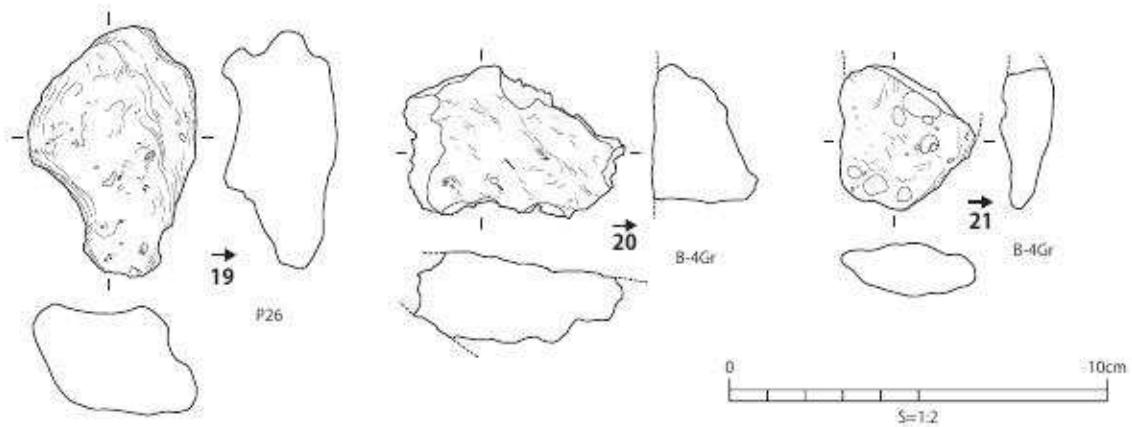
図版6 周溝状遺構実測図



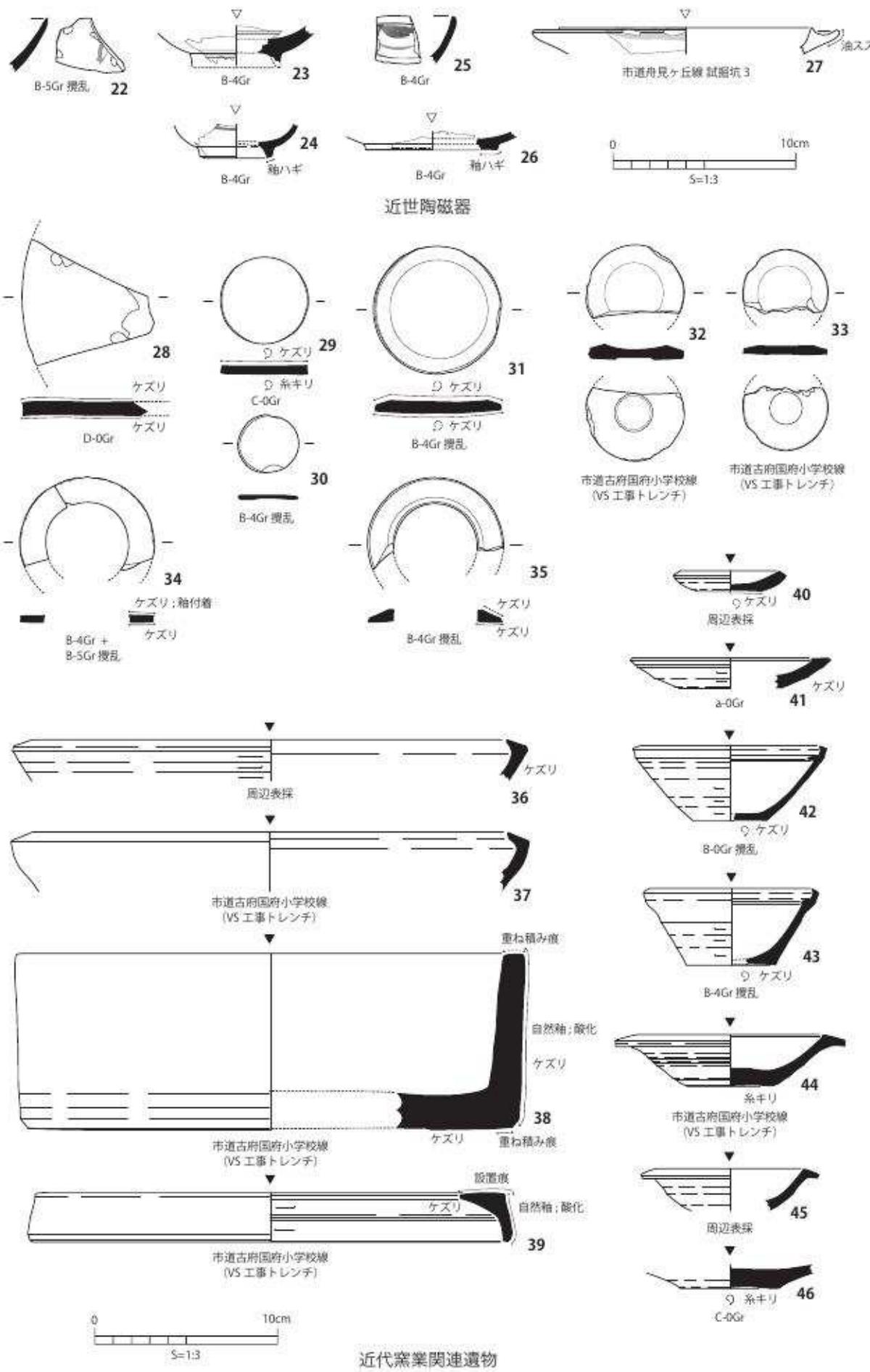
図版
7 出土遺物実測図
1



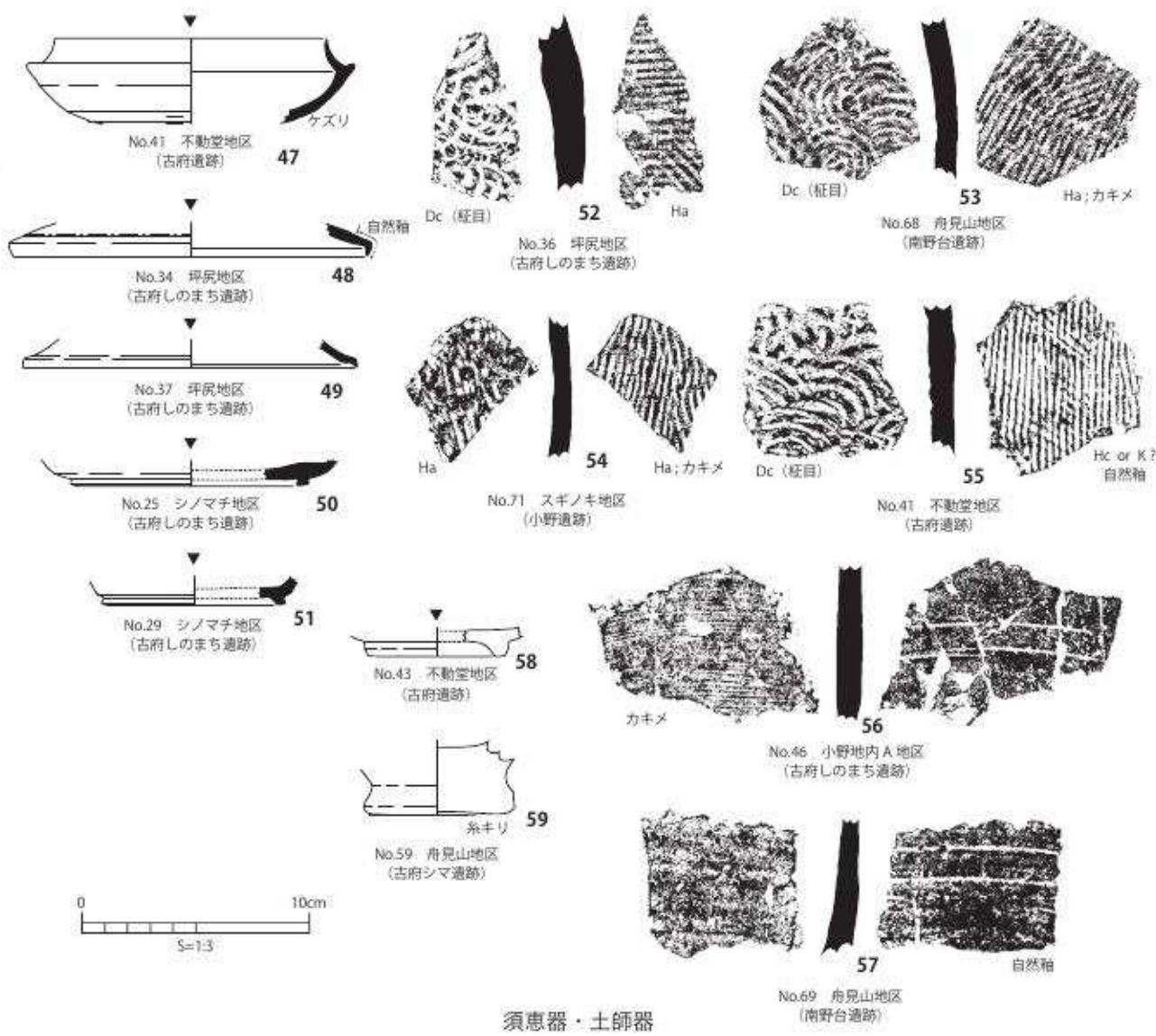
須恵器・土師器



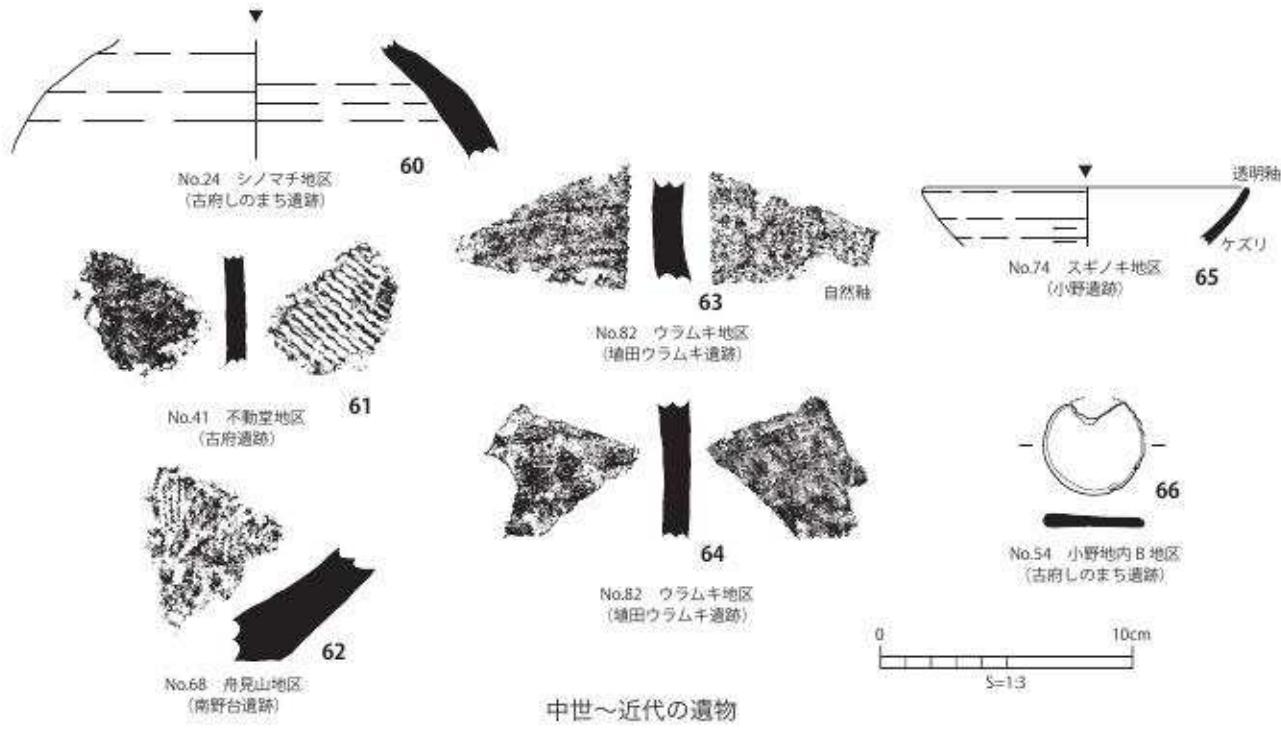
鍛冶関連遺物 (楕円形鍛冶炉)

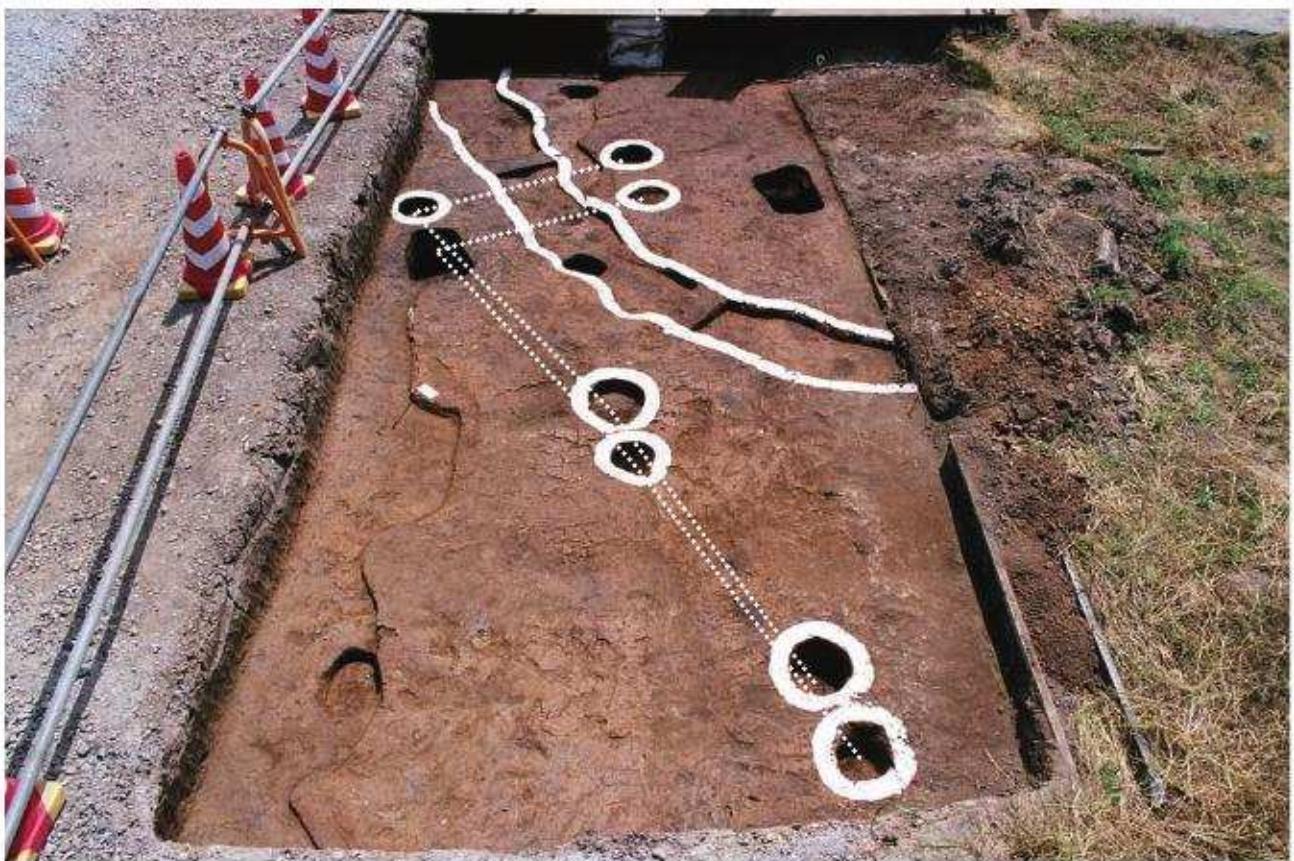


図版
9 平成
13 年度踏査採集遺物実測図



須恵器・土師器





SB02 (P33-35-37)・SB03 (P34-36-55-38)



SB04 (P39-40-58)



SB04 (P4-27)



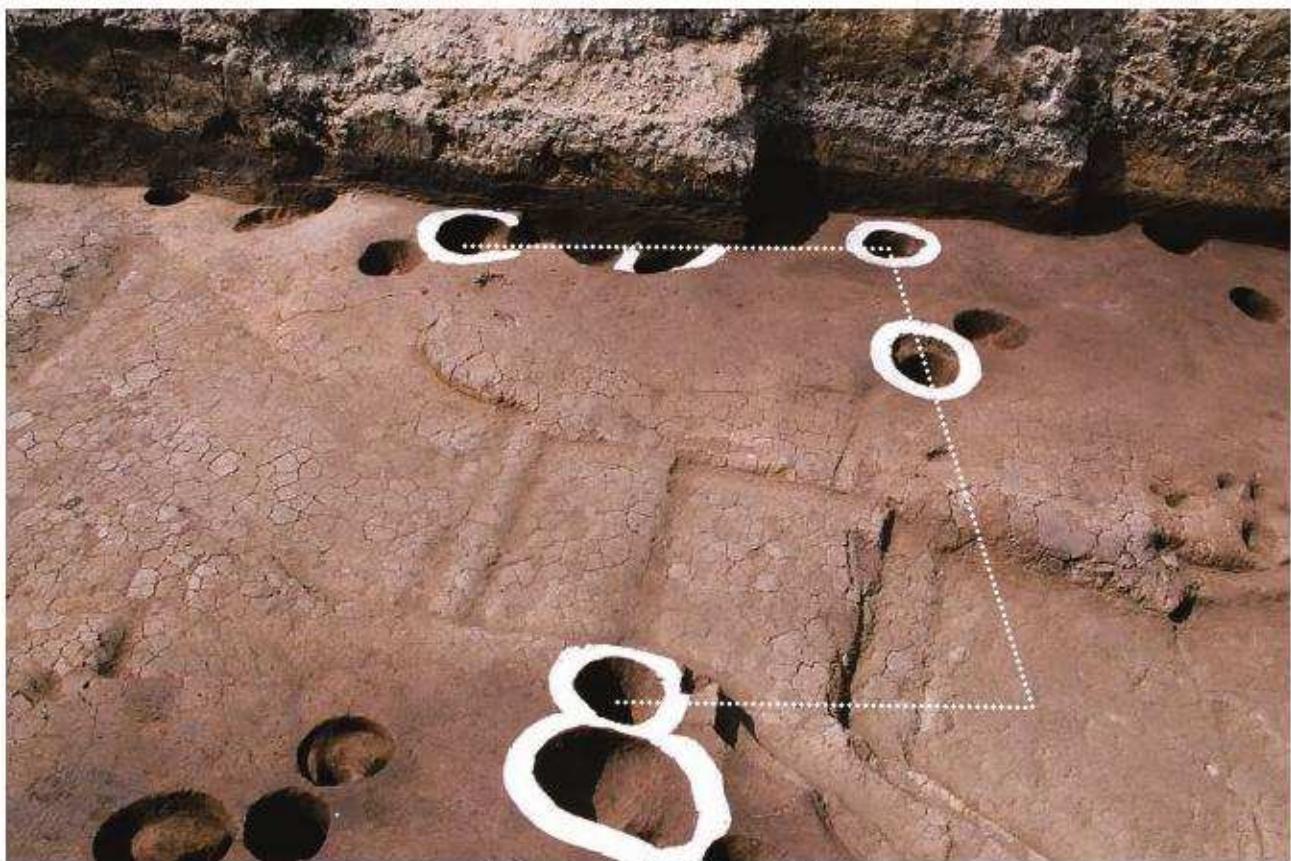
SB04 (P27 セクション)



SB05 (P75-62-64-65-67)



SB06 (P77-78-79-80)



SB07 (P92-118-96-95-104)



SB08 (P105-109) · SB09 (P108-110-112)

写真図版 5 柱穴・周溝状遺構



P119



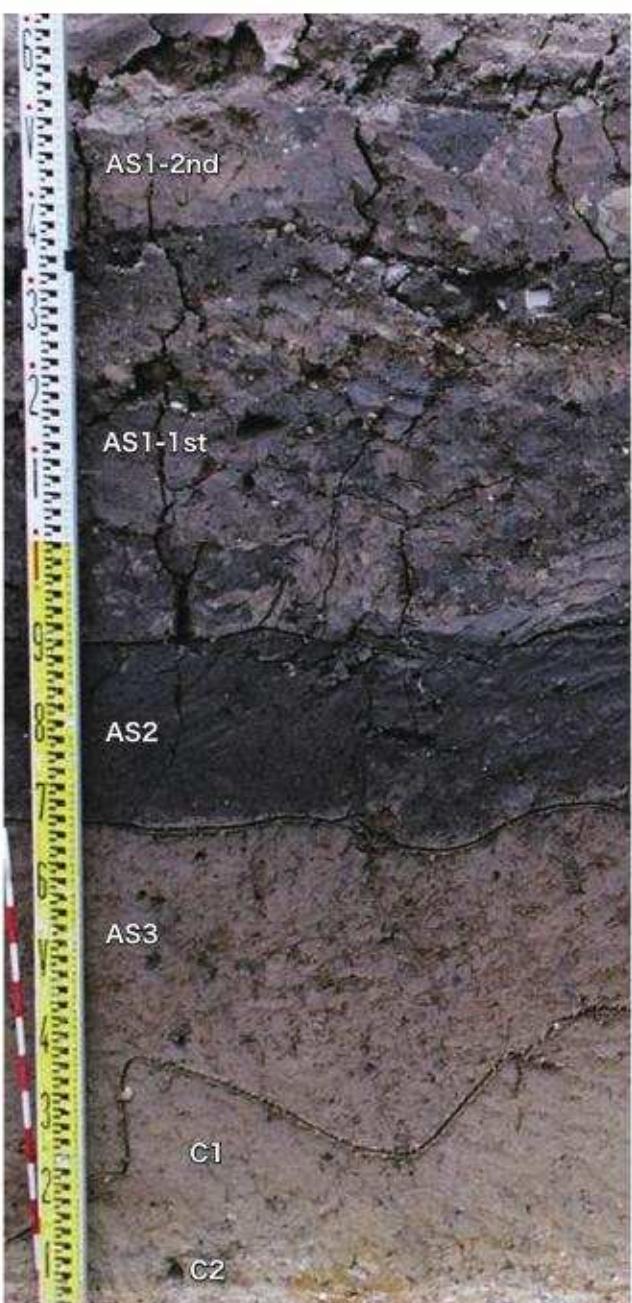
SD01



耐火粘土採掘坑跡
(市道舟見ヶ丘線：1次)



耐火粘土採掘坑跡
(市道古府国府小学校線：2次)



近現代の耕地整理による盛土の状況 (S=1:10)



須恵器・土師器



鍛冶関連遺物（楕円形鍛冶滓）



近世陶磁器



38



近代窯業関連遺物



近代窯業製品



須恵器・土師器



中世～近代の遺物

報告書抄録

ふりがな	おのいせき							
書名	小野遺跡							
副書名	舟見ヶ丘保幼園建設事業に伴う市道改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	宮田 明							
編集機関	小松市教育委員会							
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地 TEL(0761)22-4111							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おのいせき 小野遺跡	いしかわけん 小松市 こうだまち 河田町	17203	03219	36° 24' 38"	136° 30' 26"	2005.02.21~ 2005.03.22 2005.05.23~ 2005.06.17	210 m ² 395 m ²	道路改良工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
小野遺跡	集落	平安	掘立柱建物跡ほか	須恵器、土師器、楕形鍛冶滓				
要約	<p>発掘調査では、大部分で近現代の耕地整理及び製瓦業者の耐火粘土採掘坑掘削による破壊を受けていたが、辛うじて掘立柱建物跡と考えられる柱穴列を検出した。</p> <p>出土遺物は、殆どが造成層や粘土採掘坑跡からの出土で、遺構との因果関係を云々する根拠としては脆弱なものだったが、平安時代の遺物は概ね9~10世紀代に限定される。</p>							

小野遺跡

舟見が丘保幼園建設事業に伴う市道改良工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年3月31日発行

編集・発行 石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91 TEL (0761) 22-4111
印 刷 米野印刷有限会社
石川県小松市福乃宮町1-32 TEL (0761) 24-1272
